ドイツ　アカデミック街道を歩く
２０２０年　９月１９日発表
２０１８年　６月　６日完成

絵解き　地図と写真による大学入門

ベルリン大学創立の謎
フンボルト理念のウソとシュライアマハー
ベルリン大学の栄光　第１部
ドイツ　アカデミック街道を歩く　丹野義彦（東京大学名誉教授）

ドイツ　アカデミック街道を歩く

大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の４部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒ、ミュンヘンの次は、ベルリンをとりあげる。ベルリンほど奥が深く面白い都市はない。

まず、ベルリン大学の歴史について５つに分けて述べる。本論はその第１部にあたる。

◆ベルリン大学の栄光
第１部　創立の謎　フンボルト理念のウソとシュライアマハー
第２部　フィヒテ　初代公選学長
第３部　シェリング　ドイツ観念論哲学の要
第４部　ブラック・ヘーゲル入門　隠蔽された哲学者の恋
第５部　プロレスとしてのドイツ観念論哲学 －哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学－

第１部　創立の謎　フンボルト理念のウソとシュライアマハー

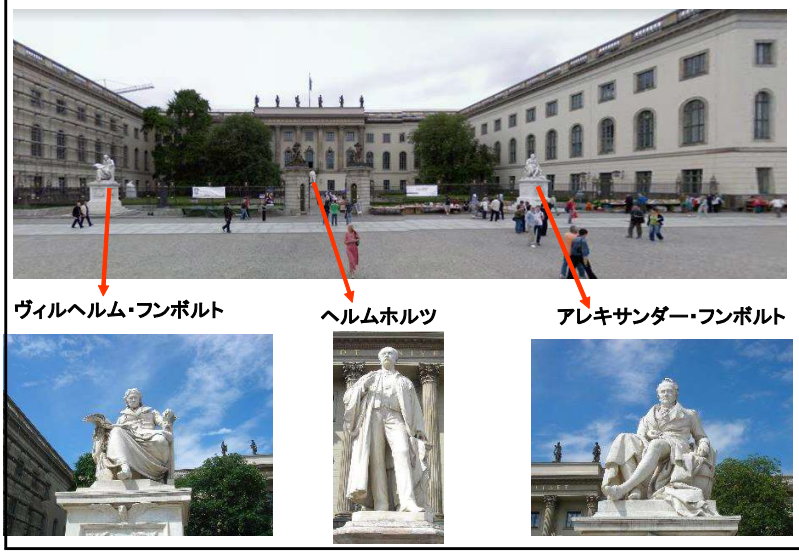
＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

ここでは、ベルリン大学創設についての歴史的ドラマを紹介したい。

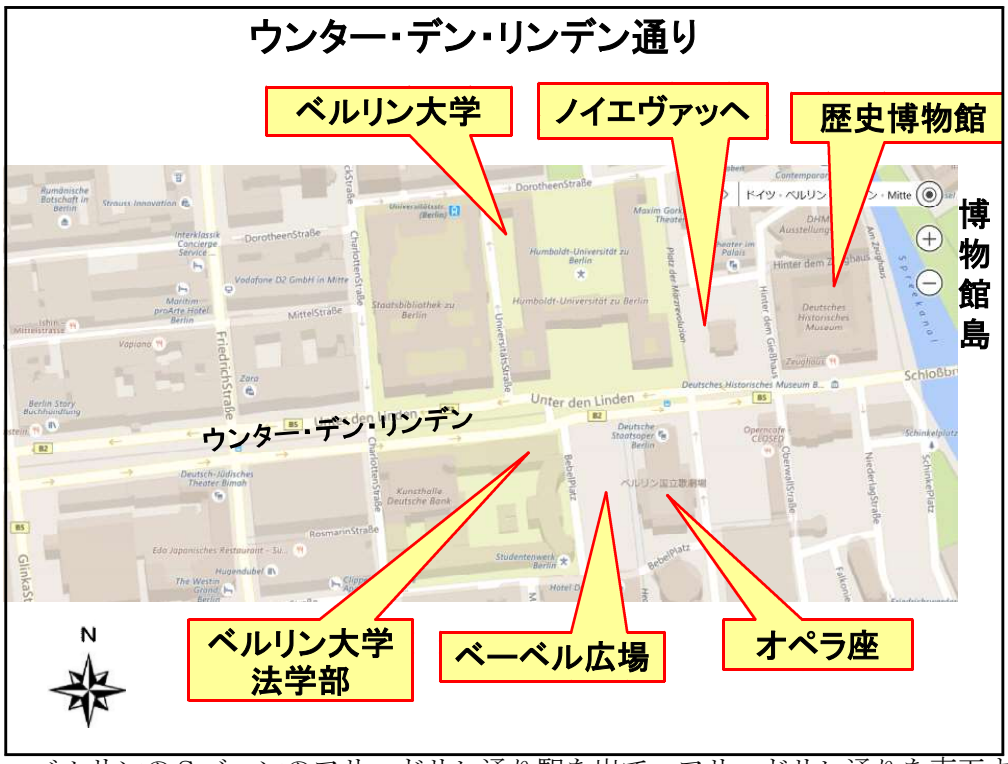
また、ベルリン大学の創設理念はフンボルトが作ったとする「フンボルト理念」が流布しているが、それは神話（ウソ）にすぎず、実はシュライアマハーという影の仕掛け人がいたことを述べる。

ベルリン大学本部（ロイヤル・ホーム）



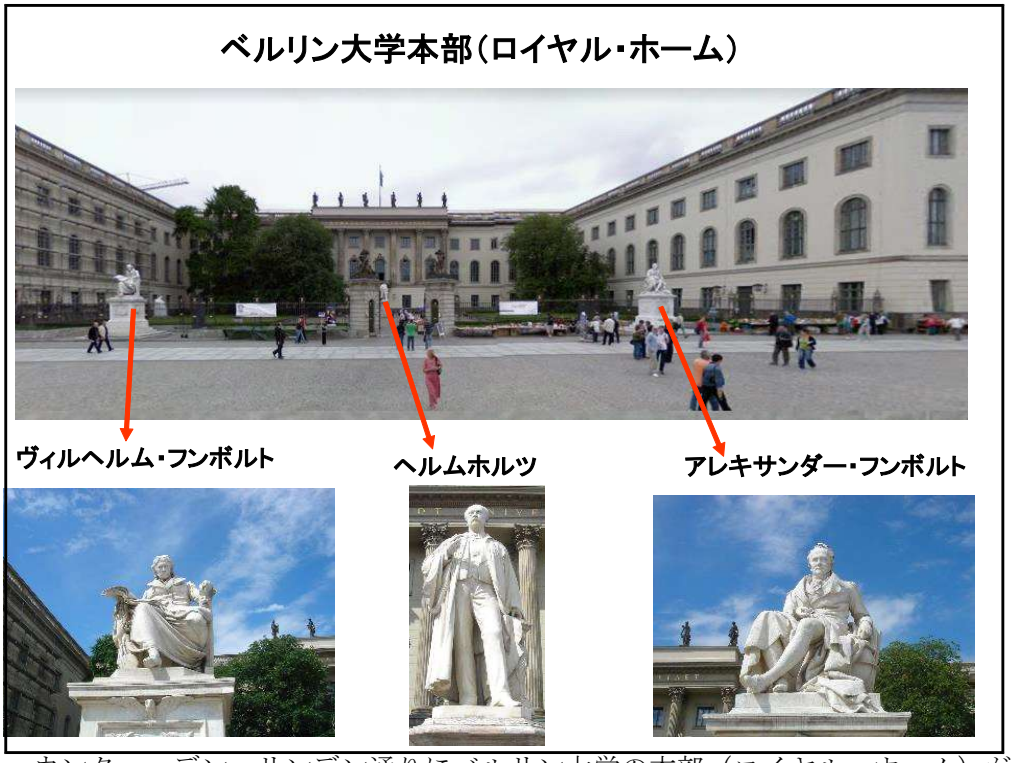
はじめに

ウンター・デン・リンデン通りのベルリン大学本部



ベルリンのＳバーンのフリードリヒ通り駅を出て、フリードリヒ通りを南下すると、ウンター・デン・リンデン通りと交わる。ウンター・デン・リンデン通りは、西端にはブランデンブルク門、東は博物館島に達し、ベルリンの中心をなす大通りであり、森鴎外の『舞姫』にも描かれているほどである。この通りに、ベルリン大学本部がある。

ベルリン大学本部（ロイヤル・ホーム）



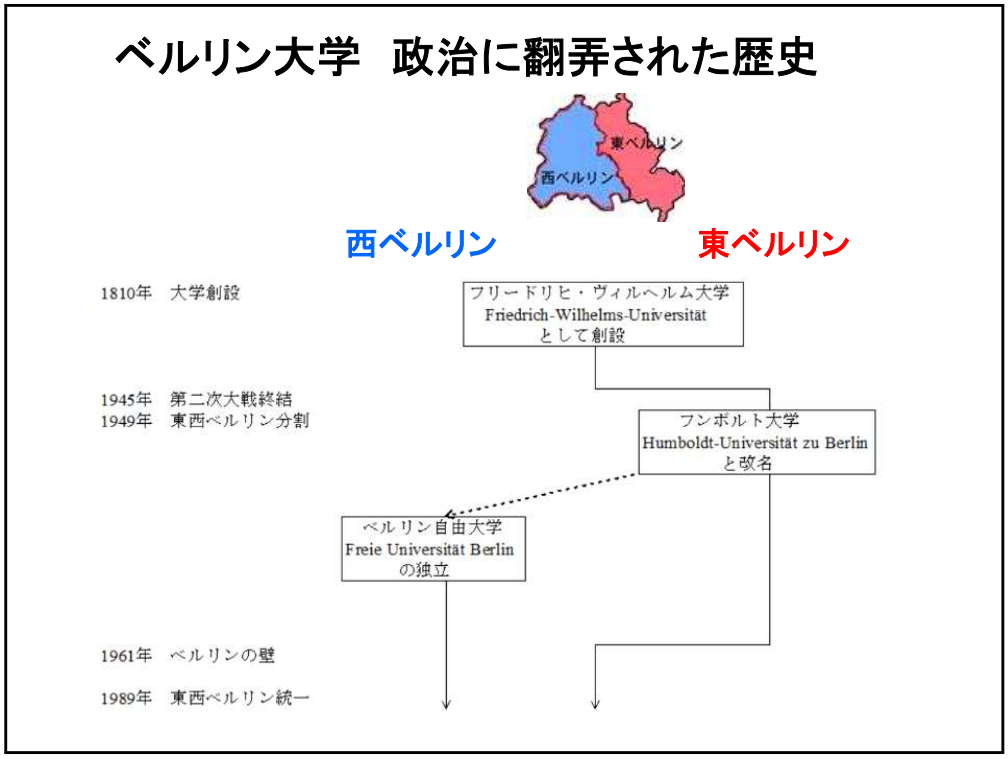
ウンター・デン・リンデン通りにベルリン大学の本部（ロイヤル・ホーム）がたっている。正面の建物には、金色で大きくフンボルト大学ベルリンと書かれているのでよく目立つ。ウンター・デン・リンデン通りはいつも観光客であふれているので、宣伝効果は大きい。

入口の門の両側には、フンボルト兄弟の全身像が立つ。左側が兄ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、右側が弟アレグザンダー・フォン・フンボルトである。兄は座って本を読んで、考え事をしている。いかにもまじめに勉強しているという感じ。

中央にはヘルムホルツの像が立つ。

このように、建物だけ見ると華やかでおごそかであるが、その歴史を見ると、政治に翻弄された波乱の歴史を持っている。

ベルリン大学　政治に翻弄された歴史



ベルリン大学の歴史を下の図に示す。

ベルリン大学の創設は新しい

1810年、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（Friedrich-Wilhelms-Universität）として創設された。創設者の皇帝の名をとってつけられた。当時からベルリン大学と呼ばれた。

ベルリン大学は、ドイツの大学としては新しい方である。ハイデルベルク大学やライプチヒ大学など古典大学に比べると新しい。また、古典大学は静かな地方都市に作られるのがふつうである。イギリスでは、ロンドンとオクスフォード大学・ケンブリッジ大学が典型的である。イタリアにおいても、ローマとボローニャ、ミラノとパヴィア、フィレンツェとピサ、ヴェネツィアとパドヴァといった組み合わせがみられる。これに対し、ベルリン大学は大都会ベルリンの真ん中に作られた大都市大学である。この点でも近代的である。

創設時には大きなドラマがあり、フンボルト兄弟、フィヒテ、シュライアマハー、シェリング、ヘーゲルといったドイツ学問の大立て者がかかわった。

政治に翻弄された歴史

1949年に、東西ベルリンに別れると、ベルリン大学の本部は東ドイツ側になった。東ドイツ政府は帝政を否定していたので、ヴィルヘルムとアレクサンダーのフンボルト兄弟の名前をとって、フンボルト大学ベルリン（Humboldt-Universität zu Berlin）と改称された。

フンボルト大学は東ドイツ政府によってマルクス主義の大学となったため、多くの教員はベルリン大学を辞めて、西ベルリン市内にベルリン自由大学（Freie Universität Berlin）を作った。この大学は今に続いている。

その後、1961年にベルリンの壁が作られ、東西ベルリン市が完全に分割された。

1989年に東西ベルリンが統一されると、フンボルト大学は、西側の資本主義社会に吸収されて、共産主義の教員は大学から追い出された。こうしてフンボルト大学は現在にいたっている。

ベルリンの壁　　もし日本でおこったら

　ベルリンの壁といっても、ベルリンの真ん中に壁が作られたといった程度のイメージしか持てず、少しピンとこないところがある。日本と東京に喩えて言うと、わかりやすいかもしれない。大きさで言うと、ベルリンは、東京都23区の1.5倍の大きさなので、だいたい同じような規模である。

　第二次大戦後、日本は、ドイツのように西と東に分割統治された可能性があった。図に示すように、西日本（大日本民国）はアメリカと連合軍が占領し、東日本（日本民主主義人民共和国）はソ連に占領される。東西の行き来は禁じられ、家族が東西にバラバラになったとしても連絡もとれなくなる。
　そして、東京も東西に分割される。山の手線を東西に真っ二つに切り、西がアメリカ領、東がロシア領に分かれる。アメリカ領の周りには高い壁「トウキョウの壁」が築かれていて、ロシア領の人はアメリカ領には入れない（壁を無断で越えようとすると射殺される）。アメリカ領は完全に閉じ込められてしまう。たまたま文京区に本部があった東京大学は、マルクス主義の大学となったため、多くの教員は東京大学を辞めて、西東京に東京自由大学を作る（あるいはたまたま西東京にあった東京大学駒場キャンパスがその拠点となったかもしれない）。1950年には、日本戦争（朝鮮戦争ではなく）がおこり、日本が戦場となる。こうした状況が1961年から20**年まで続くのである。20**に壁はなくなると、マルクス主義の教員は追放され、混乱は続く。

　日本は、ドイツの枢軸国で敗戦したのに、ドイツのような分割はされなかった。日本のかわりに分割されたのが朝鮮半島であった。朝鮮半島の分割の悲劇は、実は日本におこってもおかしくなかった。日本のかわりに分割された南北朝鮮に対して、日本人はもっと感謝しなくてはならないのかもしれない。

ベルリンを知ることは世界政治を知ること
　ベルリン大学ほど、政治に翻弄された波乱の歴史をたどった大学も少ないだろう。呼び方ひとつにもこの大学の政治の歴史が刻まれている。
　その後の自然科学の興隆とナチス政権による弾圧、ベルリンの壁によるベルリン自由大学の独立、東西統一時の混乱など、波乱に満ちた歴史を辿った。ベルリンを知ることは世界政治を知ることである。これほど政治史をリアルに感じられる都市はないだろう。ベルリン大学を知ることは世界の大学の歴史を知ることでもある。

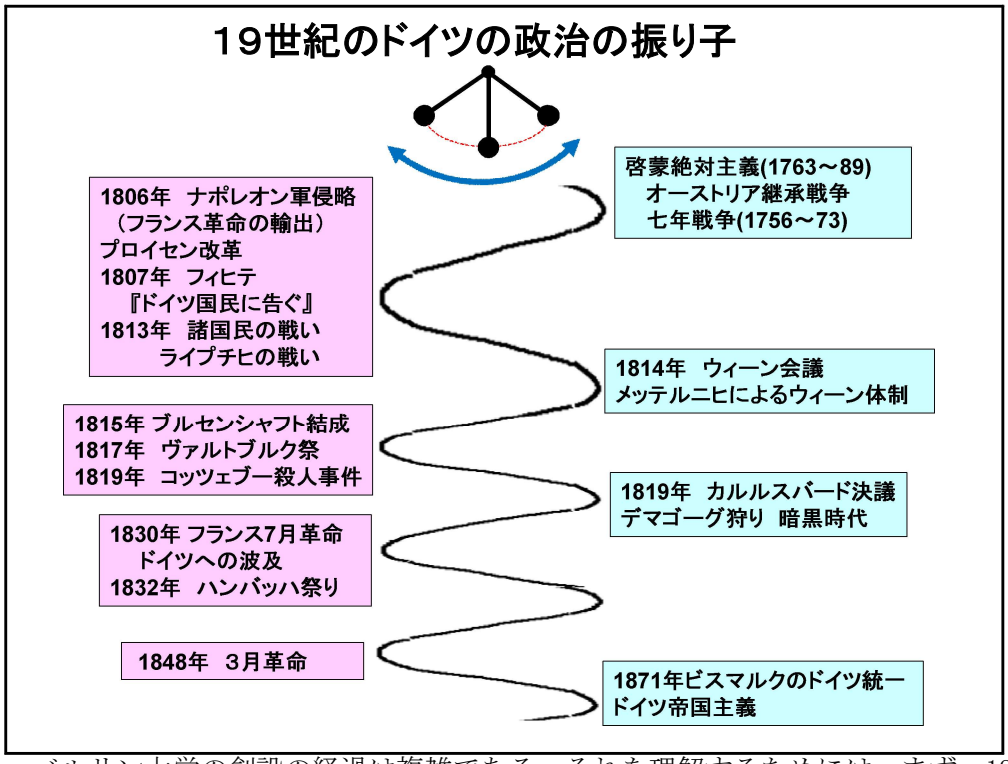
＊ベルリン大学の呼び方について
　本論では、古い歴史上の呼び方にしたがって、フンボルト大学のことを「ベルリン大学」と呼ぶことにする。

第１章　ベルリン大学創設のドラマ

＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

１９世紀のドイツの政治の振り子



ベルリン大学の創設の経過は複雑である。それを理解するためには、まず、19世紀のドイツの政治状況について知っておく必要がある。19世紀のドイツ政治は、振り子のように、左へ右へと揺れ動いた。

啓蒙絶対主義

18世紀後半は、ドイツは啓蒙絶対君主の時代（1763～89年）であった。啓蒙絶対君主とは、啓蒙思想をかかげて「上からの近代化」を図った君主である。プロイセン・オーストリア・ハプスブルク家、ロシアなどの国が典型的である。これにより、オーストリア継承戦争や七年戦争（1756～73年）などがおこった。

ナポレオン軍の侵略

1789年のフランス革命の後、1806年にナポレオン軍がヨーロッパを侵略した。フランス革命をヨーロッパに輸出するという自由主義の側面と、ヨーロッパ侵略という側面があった。ナポレオンはドイツの西部を占領し、「ライン同盟」という属国を作り、これによって、1000年続いた神聖ローマ帝国が解体した。東側に残ったプロイセン王国は、1806年にフランスに宣戦したが、大敗した。こうしてナポレオンはベルリンを占領した。

これに対して、プロイセンは、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム３世のもと、宰相シュタインやハルデンベルクらの官僚によって、国の大改革がおこなわれた（プロイセン改革）。日本でいえば明治維新のような大改革である。上からの改革だけでなく、下からの改革運動もおこった。国民レベルでナポレオン支配からの解放運動がおこり、その代表がフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』である。こうした改革によって、プロイセンはやっとナポレオン軍を追い出した（1813年の諸国民の戦い、ライプチヒの戦い）。

ウィーン体制

ナポレオン失脚後、1814年のウィーン会議によって保守的な政治体制ができた。ライン同盟は解体され、「ドイツ連邦」が成立し、これをプロイセンとオーストリアが守護するという「ウィーン体制」ができた。その中心になったのが、オーストリアの宰相メッテルニヒである。

ブルセンシャフト

ドイツをナポレオン軍から解放する「諸国民の戦い」には多くの学生たちが参加したが、戦争から帰って

きた学生たちは、意気が上がり、自由で愛国的な政治を期待した。ところができたのは保守的なウィーン体制であった。これに反発した学生たちは、「ブルセンシャフト」という学生組合を作り、政治的な運動を始めた。そして、1817年の「ヴァルトブルク祭」でその頂点に達した。そして、運動は政治的に過激化し、あちこちで事件がおこった。1819年のコッツェブー殺人事件もそのひとつである。

カルルスバード決議とデマゴーグ狩り

こうした学生運動を反体制運動として弾圧したのが、メッテルニヒであった。彼は、1819年には「カールスバードの決議」を取りつけて、ブルセンシャフト運動を禁止した。言論は統制され、ブルセンシャフトのリーダーを「デマゴーグ」と呼んで、デマゴーグ狩りがおこなわれた。政治的な暗黒時代といわれる。

フランス７月革命の波及

暗黒時代はしばらく続いたが、1830年にフランスで７月革命がおこり、ドイツにも波及した。1832年にはハンバッハ祭りが開かれた。

３月革命

1848年にヨーロッパで革命が広がった。ドイツでも３月革命が起こり、ベルリンで市街戦がおこった。

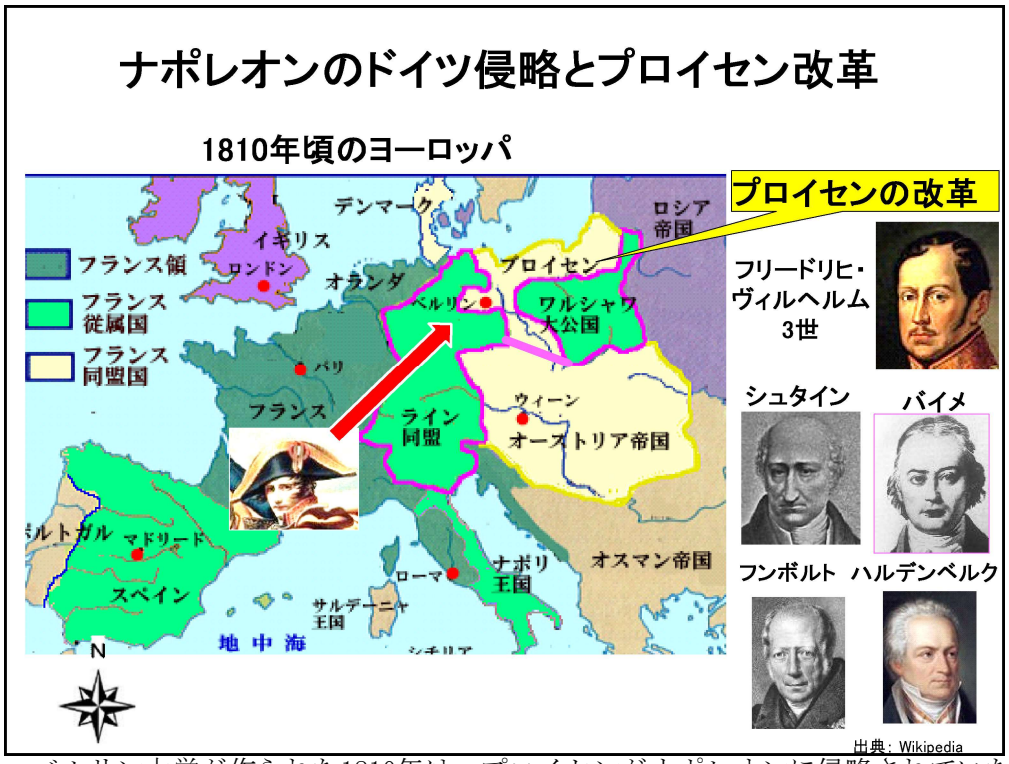
ビスマルクのドイツ統一ドイツ帝国主義

1871年に、プロイセンの宰相ビスマルクがドイツ統一を果たした。念願のドイツ統一という側面と、ドイツ帝国主義の開始という側面をもつ。

プロイセンはドイツの辺境にあった国である。ドイツの中心は神聖ローマ帝国やハプスブルク家にあった。プロイセンがドイツを統一したことは、日本でいうと辺境にあった薩摩藩・長州藩が明治政府を作って日本を統一したようなものである。

その後のドイツは第一次大戦に突入し、その敗北後、ワイマール共和国が成立した。1933年にはナチスが政権を握り、ヨーロッパへと侵略し、第二次大戦へと突入する。

ベルリン大学の創立はナポレオンから始まった
ナポレオンのドイツ侵略とプロイセン改革



ベルリン大学が作られた1810年は、プロイセンがナポレオンに侵略されていた時期であった。すべてはナポレオンの侵略から始まった。

ナポレオンは、フランス革命をヨーロッパに拡大する名目で領土を広げたが、しかし、占領地からすればただの侵略にすぎない。1806年、ナポレオンはドイツの西部を占領し、神聖ローマ帝国が解体した。東側に残ったプロイセン王国は、1806年にフランスに宣戦したが、大敗した。こうしてナポレオンはベルリンを占領した。

プロイセン政府は、ケーニヒスベルクに逃れて臨時政府を作った。プロイセンはかつてない屈辱を味わった。そして、ティルジットの和約により、領土を大きく失った。この地図からわかるように、大国だったプロイセンは、西側をライン同盟、東側をワルシャワ大公国というナポレオンの属国に奪われて、小国におちぶれてしまった。

プロイセン改革

このナポレオンの屈辱によってプロイセンは目覚めた。国王フリードリヒ・ヴィルヘルム３世のもと、宰相シュタイン、ハルデンベルク、バイメ、フンボルトらの官僚によって、国の大改革がおこなわれた（プロイセン改革）。

◆プロイセン改革

近代化政策	中心人物
①農奴解放	シュタイン
②都市自治	
③農民への土地付与	ハルデンベルク
④行政改革（内閣制度確立）	
⑤国民軍（徴兵制）創設	シャルンホルスト
⑥教育制度改革とベルリン大学創設	バイメ、フンボルト

経済改革（農奴解放、農民への有償土地付与）、行政改革（都市自治、内閣制度確立）、軍政改革（徴兵制による国民軍の創設）、そして教育改革（学校制度改革とベルリン大学創設）など、さまざまな改革が実行された。日本でいえば明治維新に当たる大改革である。このうち教育改革の中心となったのがバイメとフンボルトである。

上からの改革だけでなく、下からの改革運動もおこった。国民レベルでナポレオン支配からの解放運動がおこった。その代表がフィヒテの1807年『ドイツ国民に告ぐ』である（後述）。

こうした改革によって、プロイセンはやっとナポレオン軍を追い出すことになる。ナポレオン軍は、ライン同盟やプロイセンを従えてロシア遠征に行くが、失敗した。プロイセンは寝返って、ナポレオン軍を破った（1813年の「諸国民の戦い」とも呼ばれるライプチヒの戦い）。ドイツとフランスは、かくも戦争の歴史である。

つねづね不思議に思うことは、19世紀にはフランスのナポレオンがヨーロッパを侵略し、20世紀にはドイツのヒトラーがヨーロッパを侵略した。どちらも大規模な搾取をおこなった大悪党なのに、ナポレオンが英雄視されるのはなぜなのだろうか。

ベルリン大学の創設

ベルリン大学の創設の経過は少し複雑である。いろいろな人がいろいろな意見を出して、対立したり妥協したり、多くのドラマがあった。

ベルリン大学は３段階を経て創設された。第１段階（ハレ大学ベルリン移転案）、第２段階（バイメ構想）、第３段階（フンボルト＝シュライアマハー構想）である。

◆ベルリン大学の創設への３段階

段階	構想案	年代	代表的人物	構想内容	教授人事
第１段階	**ハレ大学ベルリン移転案**	1806年10月～	ハレ大学の大部分の教授（学長シュマルツ、フロリーヴ）	ハレ大学のベルリン完全移転	ハレ大学のすべての教員
			ハレ大学の進歩派教授（ヴォルフ、シュライアマハー）	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第２段階	**バイメ構想**	1807年９月～1808年６月	バイメ	ベルリンに新しい高等職業教育施設を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第３段階	**フンボルト＝シュライアマハー構想**	1809年２月～1810年４月	フンボルト、シュライアマハー	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める

第１段階　ハレ大学移転案

ベルリン大学創設がどうしても必要になったのは、1806年にハレ大学がナポレオンによって封鎖されたからである。

当時のプロイセン王国の中心的な大学はハレ大学であった。ハレ大学は、1694年に、プロイセンのフリードリヒ１世により創設され、当時の進歩的な学者が集められた。当時の教授団の中心はヴォルフであり、「神学を哲学から解放する」「哲学を国家権力から解放する」と説いた。ハレ大学は、近代大学の理念である「大学の自由」の原則をはじめて打ち出した大学である。その伝統は、シュライアマハーやシュテフェンス（後述）に受け継がれた。

ドイツの大学がナポレオンに占領された

そのハレ大学がナポレオンによって封鎖されてしまった。学生たちは帰郷させられた。

地図からわかるように、ハレ大学だけでなく、ドイツのほとんどの大学はナポレオンによって占領されてしまった。首都ベルリンも占領された。あと少しでプロイセンはナポレオンによって滅ぼされかねない瀬戸際に追い込まれた。当時のプロイセンの危機感が伝わる地図である。

ハレ大学を失ったプロイセン政府は、第１に、ハレ大学にかわるプロイセンの大学を早く作らなくてはならなったし、第２に、失業したハレ大学の教員の面倒をみなくてはならなくなった。ならば、ハレ大学をそっくりそのまま首都ベルリンに移転するのが最も手っ取り早い。

1807年８月には、ハレ大学の教員がまとまって、国王に対して、大学のベルリン移転を求める請願書を出した。ハレ大学の学長だったシュマルツとフロリーヴが代表となって、フリードリヒ・ヴィルヘルム３世に陳情した。これに対して国王は、「わが国は物質的な力で失ったものを精神的な力で補わなければならない」という有名な言葉を述べた。このことを学長シュマルツは後に繰り返し宣伝した。

しかし、国王は、そのまま移転するという約束はしなかった。できるだけ全部の教授をベルリンに移転するように努力するが、財政的な逼迫もあるので確約はできない、と答えた。そして、すぐに国王は側近のバイメ Carl Friedrich von Beyme に対して、ベルリン大学創設を命じた。

ハレ大学の教員の中にも、意見の対立があった。表に示すように、大部分の教授たちは、今の失業状態を何とかしたいので、全員のベルリン移転を望んでいた。一方で、進歩的な思想の教授（例えば、ヴォルフやシュライアマハーなど）は、全員を連れて行くのではなく、優秀な適任の教授だけを選んで連れて行き、全く新しい構想で新大学をつくるべきだと考えていた。ここにドラマが潜んでいた。

第２段階　バイメ構想

ベルリン大学創設を任せられたのはバイメであった。彼は国王とシュタイン首相の側近であった官僚である。1807年９月、バイメは高等教育施設設立に関する政令を出した。これが第２段階のバイメ構想である。

◆ベルリン大学の創設への３段階

段階	構想案	年代	代表的人物	構想内容	教授人事
第１段階	**ハレ大学ベルリン移転案**	1806年10月～	ハレ大学の大部分の教授（学長シュマルツ、フロリーヴ）	ハレ大学のベルリン完全移転	ハレ大学のすべての教員
			ハレ大学の進歩派教授（ヴォルフ、シュライアマハー）	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第２段階	**バイメ構想**	1807年９月～1808年６月	バイメ	ベルリンに新しい高等職業教育施設を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第３段階	**フンボルト＝シュライアマハー構想**	1809年２月～1810年４月	フンボルト、シュライアマハー	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める

バイメは、単にハレ大学をそっくりベルリンに移転するつもりはなかった。彼は、５年前の1802年から、ベルリンに実用的高等教育施設 Allgemeine Lehranstald を作ろうという提案書を出していた。

当時は、ベルリンに高等教育機関を作ろうとしていろいろな案が出ていた（シェルスキー、1970）。

①すでにベルリンにあった各種の専門教育施設を統合した職業専門教育の施設（単科大学 Hochschule）
②科学アカデミーと連携した高等教育施設Lehranstald
③既存の大学や①との関係を断ち切った全く新しい型の高等教育施設Lehranstald

このような高等職業教育機関案はもっと昔からあり、バイメの前の教育改革を担当したマッソウの時代から企画されていたという。しかし、マッソウが失脚したため、立ち消えになっていた。他にも、この時代に、ベルリンにいろいろな高等教育施設を作ろうという構想はたくさんあったようだ。

バイメの案は③に属していた。これは、梅根（1973）によると、ナポレオンが力を入れたエコール・ポリテクニークをモデルとしていた。大学のような研究機関や真理探究の場ではなく、役人や医師など高等職業教育をおこなう施設を作るというものであった。プロイセン改革によって近代的な国作りをするために必要な教育改革であった。

バイメは、ハレ大学をベルリンに移転するのではなく、全く新しい構想で新施設をつくり、ハレ大学以外にも広く人材を求めるべきだと考えていた。

上の表で、バイメ構想をみてみよう。ハレ大学の教授たちの案と較べると、構想の点では全く違っている。グランゼコールは「大学」ではない。フランスでは、例えば、エコール・ポリテクニークやエコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）などのグランゼコール（Grandes Écoles、高等職業教育機関）は、大学より格上のエリート機関となっている。また、教授人事については、ハレ大学の大部分の教授たちの意見とは全く違っており、この点では、むしろハレ大学の進歩派（ヴォルフやシュライアマハー）と一致していた。

バイメの依頼によるベルリン高等教育機関の構想

1807年９月から、すぐにバイメは創設準備を始めた。

教授として招聘する学者10名のリストを作った（下表）。そして、バイメは、この10名に新しいベルリン高等教育機関の構想案を出すように頼んだ。これに答え、彼ら10名は構想書や意見を書いて、バイメに提出した。

この中で有名なのは、哲学者フィヒテのものである。彼は１ヶ月で構想書を書き上げて、バイメに提出した。これが「ベルリンに設立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた、高等教授施設の演繹的プラン」という文書である。しかし、フィヒテの構想は、純粋に学問的な機関を作るというものであり、バイメの考え（実用的高等教育機関）とは正反対であったので、バイメはこの文書を無視した。後にフィヒテの文書は公刊された。

◆ベルリン高等教育機関についての構想を書いた学者　　梅根（1973）

バイメが招聘した教授	バイメが招聘しなかった教授
ウォルフ ←	シュライアマハー
シュマルツ	シュテフェンス
フロリーヴ	
ライル	
ローデル	
ベルンシュタイン	
ニーマイアー	
ファーター	
フーフェラント	
フィヒテ	

赤字はハレ大学教授

ベルリン大学創設をめぐるアンソロジー

さて、上で述べたベルリン大学の構想を論じた４つの論文は、明治書院の「世界教育学選集」に収録されており、日本語で読むことができる。

①フィヒテ「ベルリンに設立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた、高等教授施設の演繹的プラン」　世界教育学選集53

③シュライアマハー「ドイツ的意味での大学についての随想」　世界教育学選集17

②シュテフェンス「大学の理念についての講義」　世界教育学選集53

④フンボルト「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」　世界教育学選集53

これら４つの大学論は、ベルリン大学の創設の裏側を知る貴重な資料である。ひとつの大学創設にかかわって、当時の第一線の哲学者・学者が、大学の本質について熱く語るというケースは珍しい。さらに、その文書が公刊されて残っているのも珍しいことである。大学論の歴史のうえできわめて貴重である。

なお、この論文集のネタ本となったのは、シュプランガーがベルリン大学100年を記念して編んだアンソロジーである（後述のように、ここにミソがある）。

①フィヒテ（梅根悟訳）「ベルリンに設立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた、高等教授施設の演繹的プラン」『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（『世界教育学名著選９　大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
②シェライエルマッヘル（梅根悟・梅根栄一訳）「ドイツ的意味での大学についての随想」　『世界教育学選集17　国家権力と教育：大学論・教育学講義序説』明治図書、1961.
（シュライアマハー（深井智朗訳）『ドイツ的大学論』（未来社、2016）にも収録）
③シュテフェンス（梅根悟訳）「大学の理念についての講義」　『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（『世界教育学名著選９　大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
④フンボルト（梅根悟訳）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」.『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書、1970）に収録.
（『世界教育学名著選９　大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
（フンボルト（メンツェ編、ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）『人間形成と言語』（以文社、1989）にも収録）

ベルリン高等教育機関の構想いろいろ

さて、上の表の左の列を見ると、ほとんどがハレ大学教授でり、人事については、ハレ大学ベルリン移転説にもとづいていることがわかる。

ただし、フィヒテやフーフェラントのように、ハレ大学とは関係のない学者も入っている。

さらに、注目すべきは、ハレ大学教授なのに招聘されなかった者もいることである。それは、上の表の右の列に示すシュライアマハーとシュテフェンスである。シュテフェンスはシェリングの弟子であり、彼らは同僚として仲がよかった。しかし、バイメと仲が悪かったのである。それにしてもシュライアマハーは、ハレ大学の優秀な教授だけを選んで新しい大学をつくろうと主張していたのに、しかも同じ進歩派のヴォルフは招聘されたのに、自分がその選からもれてしまった。非常に悔しい思いである。彼らを含めて、呼ばれな

かった教授たちの不満は強くなった。
　そこで、シュライアマハーとシュテフェンスは、招かれなかった恨みもあり、バイメの実用的高等教育機関構想を徹底的に論破しようとして、論文を書いて発表した。シュライアマハーは、1808年に「ドイツ的意味での大学についての随想」を発表した。この本は「大学論として古今を通じて最大の傑作」と評価されている（梅根, 1961）。また、シュテフェンスは1809年に「大学の理念についての講義」を発表した。これらの文書は、いずれもバイメの実用的高等教育機関を否定したものになった。その点では、フィヒテを含めた３人の文書が、期せずして一致した。これは、大学が単なる専門学校ではなく、純粋に学問的な機関であることを宣言する大学論史上のメルクマールとなった（後述）。この点で、現代的な意義も持っている。
　ただし、シュライアマハーについて、バイメは、はじめ呼ぶつもりがなかったが、後にウォルフの説得で考えを変えて、招聘することにした（それでこの表では矢印をつけてある）。しかし、シュテフェンスは結局呼ばれず、ハレ大学に残った（ずっと後にベルリン大学に移り、シュテフェンスとは生涯の友であった）。

バイメの失脚とフンボルトの登場
　もし、このままバイメの構想が実現していたら、ベルリン大学ではなく、ベルリン高等職業学校のような名前となっていただろう。ただし、教授人事は、ハレ大学の教授がそのまま横すべりすることになっただろう。ところが、事はそのようには運ばなかった。
　というのは、1808年６月に、バイメは失脚してしまったからである（高等法院長に転出）。後ろ盾のシュタイン首相もナポレオンの圧力によって左遷されてしまった。これによって、高等職業学校の設立はストップしてしまった。
　また、1808年には、ナポレオンの命令で、ハレ大学が再開された。つまり、失業したハレ大学の教員の面倒をみる必要はなくなり、ハレ大学のベルリン移転の必要はなくなったことになる。

第３段階　フンボルト＝シュライアマハー構想

シュタインのあとを継いだのはハイデンベルク首相である。彼は、1809年２月、文化教育局の長官としてフンボルトを任命した。フンボルトはバイメを引き継いでベルリン大学創設に尽くした。

◆ベルリン大学の創設への３段階

段階	構想案	年代	代表的人物	構想内容	教授人事
第１段階	**ハレ大学ベルリン移転案**	1806年10月～	ハレ大学の大部分の教授（学長シュマルツ、フロリーヴ）	ハレ大学のベルリン完全移転	ハレ大学のすべての教員
			ハレ大学の進歩派教授（ヴォルフ、シュライアマハー）	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第２段階	**バイメ構想**	1807年９月～1808年６月	バイメ	ベルリンに新しい高等職業教育施設を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第３段階	**フンボルト＝シュライアマハー構想**	1809年２月～1810年４月	フンボルト、シュライアマハー	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める

フンボルトは、政治家として国王に進言し、プロイセン政府と交渉して、予算や建物を獲得した。フンボルトは、このような政治的な動きはできたものの、教育については全くのシロウトだし、大学で教えたこともなく、大学創設の理念を作るなどということはできなかった。

ここで、フンボルトに教育学や大学論の助言をして黒幕となった人物がいた。それがシュライアマハーであった。彼はバイメと仲が悪かったが、バイメが失脚したため、急浮上した。また、ドーナ伯爵のコネも大きい。つまり、シュライアマハーは昔ドーナ伯爵の子息の家庭教師をしたが、そのドーナ伯爵が今や内務省主幹となっていたため、彼をフンボルトに推薦したのである。フンボルトは、シュライアマハーの書いた「ドイツ的意味での大学についての随想」を読んでいたようだ。

フンボルトのもとで、シュライアマハーは、ベルリン学術局の責任者となり、ベルリン大学設置委員会の委員として、設立に尽くした。ベルリン大学の創設理念となったのはフンボルトが書いた「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」（1809～1810年）という文書であるとされてきた（後述）が、この文書も、とくに前半部分はシュライアマハーとの共同作業だという（深井、2016）。1810年２月には、学術委員会の委員長として大学の人事権を握った。

そこで、フンボルトの構想を「フンボルト＝シュライアマハー構想」と呼ぶことにする。この構想は、上の表に示すように、ベルリンに新しい「大学」を作るというものであり、バイメの「高等職業教育施設」案を否定した。これはもともとシュライアマハーの構想に近い。

教授人事については、ハレ大学のすべての教員を移転させるのではなく、ハレ大学を中心として、広く人材を求めることになった。というのは、1808年にはハレ大学が再開したために、ベルリンへの完全移転は必要がなくなったからでもある。ハレ大学に残った教授も多かった。とはいえ、ウォルフ、シュライアマハー、フーフェラントといったハレ大学の教員が多くベルリンに移った。ハレ大学の学長だったシュマルツがベルリン大学の初代学長となった。フンボルトは、ゲッティンゲン大学の数学教授ガウスを呼びたかったが、ガウスは辞退した。また、フンボルトの弟のアレクサンダーにも声をかけたが、断られた。他の大学からも呼ぼうとしたが、あまり集まらなかった。

以上のように、「フンボルト＝シュライアマハー構想」は、ハレ大学移転構想とバイメ構想との中間的な性格を持っている。つまり、ベルリン大学の創設は、ハレ大学教授団とバイメによって作られ、フンボルト＝シュライアマハーはそれを受け継いだにすぎない。しかも、実質的に構想を作ったのはシュライアマハーである。フンボルトが成し遂げたことは、王や内閣に政治的に掛け合って予算や建物を獲得したことだけである。ベルリン大学の構想は後に「フンボルト理念」として神話化されたが（前述）、フンボルトという名前は、創設チームの「かんむり」にすぎず、実質的な指導者はシュライアマハーであった。よって「フンボルト理念」は「フンボルト＝シュライアマハー理念」と呼ぶべきであろう。

シュライアマハーがフンボルトへの助言者としてベルリン大学創設の実質的な指導者となったことは、少し前のベルリン大学論（梅根, 1961;1973）や、フンボルトの伝記（亀山, 1978；西村, 2015）などには触れられていない。それが指摘されたのは最近のことである（深井, 2016）。

ベルリン大学の開学

1810年10月にベルリン大学が開学した。ベルリン大学の校舎は、ウンター・デン・リンデン大通りに面したハインリッヒ公の宮殿が使われた（現代のベルリン大学本部）。

ベルリン大学の初代の学長は、ハレ大学の学長だったシュマルツである。哲学部長はフィヒテ、神学部長はシュライアマハー、法学部長はビーナー、医学部長はフーフェラントであった。

しかし、この時には、すでにフンボルトは、宗教教育局長官を辞めており、オーストリア大使としてウィーンに旅立っていた。開学時にはベルリンにすらいなかったのである。

翌1811年、学長の公選がおこなわれ、フィヒテが学長に選ばれた。
ベルリン大学の歴代の学長は、下の表のとおりである。初代はシュマルツ、第２代（公選初代）はフィヒテ、第３代はザヴィニー、第４代はルドルフィと続く。学長の任期は１年である。第６代はシュライアマハー、飛んで第18代がヘーゲルである。

◆ベルリン大学学長

代		在位	名前	専門
1	初代	1810～11年	シュマルツ Theodor Schmalz	法学
2	公選初代	1811～12年	フィヒテ　Johann Gottlieb Fichte	哲学
3	公選２代	1812～13年	ザヴィニー　Friedrich Karl von Savigny	法学
4		1813～14年	ルドルフィ　Karl Asmund Rudolphi	医学
5		1814～15年	ゾグラー　Karl Wilhelm Ferdinand Solger	哲学
6		1815～16年	シュライアマハー Friedrich Ernst Schleiermacher	神学
7		1816～17年	リンク　Heinrich Friedrich Link	生物学
｜		｜		
18		1829～30年	ヘーゲル　Georg Wilhelm Friedrich Hegel	哲学

出典　https://www.hu-berlin.de/de/ueberblick/geschichte/rektoren

よく「ベルリン大学の初代学長はフィヒテである」と書かれ、Wikipedia日本語版にもそう出ている。しかし、フィヒテは第２代学長であり、正しくは「選挙で選ばれた初代学長」つまり「初代の公選学長」である。

余談

どうでもよいことだが、昔学生から尊敬を集めていた東京大学の折原浩先生は、『大学-学問-教育論集』（三一書房，1977年）の中でこう述べていた。

「フンボルトの大学論」とは、一九世紀初頭のベルリン大学の創設に貢献した哲人文相ウィルヘルム・フォン・フンボルトの名にちなみ、かれだけではなく、初代学長フィヒテあるいは第二代学長シュライエルマッヒャーらの大学理念、教育理念を総称して、そう呼びならわしているわけですが・・・

こうした文章を読んで、私の頭には「フンボルト理念」というものがすばらしいもののように刷り込まれていた。私が教養学部の教員になったときは、折原先生は同じ建物２号館にいらした。話す機会はなかったが、大学の環境整備（学内大掃除）の日には先生は率先して構内の掃除に励んでおられて、思った通りまじめで誠実な先生だなとひそかに関心していたものだ。

重箱の隅をつつくようなことだが、フンボルトは「文相」ではないし（後述）、フィヒテは「初代学長」ではないし、シュライエルマッヒャーは「第２代」学長ではないんだけどなあ。今ならネットで５分もあれば調べられることでも、40年前は調べるのはたいへんだったのだろう。また、「フンボルト理念」も最近ではあやしくなってきている（後述）。尊敬する先生だけにちょっぴりしょっぱい思い。

＜第１章の文献＞

丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ:精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
亀山健吉『フンボルト　文人・政治家・言語学者』中公新書、1978.
梅根悟「解説」『世界教育学名著選９ 大学の理念と構想』（明治図書、1973）に収録
シェルスキー（田中昭徳・阿部謹也・中川勇治訳）『大学の孤独と自由―ドイツの大学ならびにその改革の理念と形態』未来社、1970年
フィヒテ（梅根悟訳）「ベルリンに設立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた、高等教授施設の演繹的プラン」『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（『世界教育学名著選９ 大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
シェライエルマッヘル（梅根悟・梅根栄一訳）「ドイツ的意味での大学についての随想」　『世界教育学選集17　国家権力と教育：大学論・教育学講義序説』明治図書、1961.
（シュライアマハー（深井智朗訳）『ドイツ的大学論』（未来社、2016）にも収録）
シュテフェンス（梅根悟訳）「大学の理念についての講義」　『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（『世界教育学名著選９ 大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
フンボルト（梅根悟訳）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」.『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（『世界教育学名著選９ 大学の理念と構想』（明治図書、1973）にも収録）
（フンボルト（メンツェ編、ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）『人間形成と言語』（以文社、1989）にも収録）

第２章　フンボルト理念の神話

＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

フンボルトはベルリン大学の創設者とされてきたが、これには納得できないことがたくさんある。
以下では、次の２つの謎を解いてみたい。

第１の謎　なぜベルリン大学はフンボルトを持ち上げるのか？

ベルリン大学は、1949年に、フンボルト兄弟の名前をとってフンボルト大学と改称した。
また、ベルリン大学の正門にはフンボルト兄弟の大きな像が建っており、とても目立つ。これほどフンボルトが持ち上げられている。
しかし、そもそもフンボルトはこの大学の学長でも教員でもない。学者として当時有名だったわけではない（むしろフンボルトの評価は死後に高まった）。フンボルトは、官僚として、この大学の創設にかかわっただけであり、しかも1810年に開学された時には、すでに官僚職を辞めており、ベルリンを離れていたのである。調べれば調べるほど、フンボルトのベルリン大学創設に果たした役割は小さい。これほど関係の薄い学者官僚を、ベルリン大学はなぜこれほど持ち上げるのだろうか。もし学長をつとめた有名な学者ということならば、例えば「フィヒテ大学」とか「ヘーゲル大学」としたほうがふさわしい。なのに、なぜ「フンボルト大学」なのか。フンボルトが理想化され過大評価されているのは不可解である。

第２の謎　なぜ「フンボルト理念」は過大評価されるのか？

フンボルトは、近代の大学の基本となる「フンボルト理念」を確立し、近代大学を創設した大学者とされている。私もそのように思っていた。しかし、今回調べてみて、決してそうではないことがわかった。前述のフンボルトの論文「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」を読んでみても、とても革新的な構想とは思えない。そもそも大学で教えたこともなく、たまたま教育行政にかかわったにすぎない官僚フンボルトが、近代大学の基本となる「フンボルト理念」を創造することなどありえない。しかも、調べると、ベルリン大学やドイツの大学を偉大にしたのは「フンボルト理念」ばかりではない。なのに、なぜフンボルト理念が過大評価されるのだろうか？

フンボルト理念はこのように語られてきた

フンボルトは、近代の大学の基本となる「フンボルト理念」を確立し、近代的大学を創設した学者とされている。多くの大学論の本には次のように書かれている。

近代大学の出発点は1810年に創設されたベルリン大学である。この大学の基本構想を作ったのは、フンボルトであり、近代大学はこの「フンボルト理念」から始まった。フンボルト理念の中核は研究中心主義にある。つまり、大学は教育の場である以上に研究の場であるという考え方は、このフンボルトから始まった。これがドイツばかりでなく、世界の大学を変えた。
出典：潮木（2008）vページ

潮木（2008）によると、研究中心主義とは、大学ではカリキュラムを作って教えるのではなく、教員が研究していることを教えれば、それが教育になるという考え方である。大学とはカリキュラムをこなす「学校」なのではなく、研究や科学の最先端の成果を伝える場所である。そのためには、講義だけでは不十分であり、文科系は「ゼミナール」で教育し、理科系は「実験室」で教育するというシステムである。これを作ったのがフンボルトであるとされる。
こうした大学教育のシステムは、「フンボルト理念」と呼ばれる。当時の「大学」という所は、ラテン語を用いて古典を教え込む学校にすぎず、研究や科学の最先端の成果を伝える場所ではなかった。そうした中で、教員の研究成果を学生に直接教えるという「フンボルト理念」は、世界の大学のあり方を変えた。
とくに、アメリカの大学に大きな影響を与えた。アメリカのジョンズ・ホプキンズ大学では、初代学長のギルマンがドイツで学んだフンボルト理念にもとづいて、初めて研究中心大学を作った。これがアメリカ全体に広まった。これについては、丹野義彦『アメリカ　こころの臨床ツアー』（星和書店）を参照いただきたい。

中には、次のように明確に述べている本もある。

19世紀初頭、1810年に創られたベルリン大学は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの提唱した三原則を

掲げた。目的価値とは直接関連せぬ純粋学問を追究し、研究と教育の一致と自由、教授会の自治権、この三原則である。これがドイツの大学の基本理念となって世界をリードした。新興国アメリカもベルリン大学に範をとって、ハーヴァード大学などを改革した。ごく少数のエリートを育て上げるのが目的だった。
出典：小塩（1988）64ページ

つまり、①純粋学問の追究、②研究と教育の一致、③教授会の自治権といった３原則がフンボルトによって作られたというのである。

フンボルトは脇役のひとりにすぎない

このような文章を読むと、フンボルトという大学者が、何もかも計画を立ててベルリン大学を創設したかのように聞こえるが、そうではない。前述のように、ハレ大学移転案、バイメ構想という計画がすでにあり、バイメの失脚によって、フンボルトに回ってきたにすぎない。ベルリン大学の創設においてフンボルトが果たした役割は、単に政治家として国王に進言して、予算や建物を獲得したことだけのようだ。しかも、大学の設立理念や教授人事を決めたのは、実質的にはシュライアマハーである。フンボルトはドラマの脇役ではあっても、決して主役ではなかった。

フンボルト理念のバイブル論文の実態

また、フンボルト理念のバイブルのように考えられている論文「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」を読んでみると、拍子抜けである。

出典：フンボルト（梅根悟訳）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」.『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録.
（フンボルト（メンツェ編、ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）『人間形成と言語』（以文社、1989）にも収録）

確かに、そこには①純粋学問の追究、②研究と教育の一致、③教授会の自治権といった３原則のような文章も見られる。
①研究中心主義については、下記のような文章がある。

主眼点はあくまでも学問にある。なぜなら学問が純粋な姿で現前しておれば、若干の部分的な脱線はあるとしても、大局的には、それはおのずからにして学び取られるものだからである。（訳書210ページ）

また、②研究と教育の一致については、下記のような文章がある。

学校というものは既存既成の知識を教え学ぶところであるのに反して、高等教育施設は、学問をつねにいまだ完全に解決されていない「問題」として、したがってたえず研究されつつあるものとして扱うところにその特色をもつものである。（訳書210ページ）

③教授会の自治権については、下記のような文章がある。

国家は、国家というものは本来この高等学問機関に介入したこともないし、介入できるものでもないことを、国家がそれをおせっかいすることは、それを邪魔することに他ならないことを、そして、国家なんかない方が万事はるかにうまく運ぶものであることを・・・つねに自覚しているべきである。（訳書212ページ）

しかし、これだけである。

①研究中心主義について、大学は実学を教えるところではなく、純粋な学問機関であるという主張は、確かに言語学者フンボルトの言葉としては納得できる。とはいえ、当時としても当たり前のことを述べているにすぎない。前述のフィヒテ、シュライアマハー、シュテフェンスもこのことを熱意をもって語っていた。３人の熱い大学論と比べてみると、その差は歴然としている。フンボルトの論文には、情熱も専門性も感じられない。

②研究と教育の一致について、「学問を研究されつつあるものとして教育する」という文句は最も有名で、よく引用される。「研究されつつあるものとして教育する」ことによって、研究と教育は一致すると言っている。しかし、大学教員はつねに悩むことであるが、研究と教育を結びつけたいのは山々だが、自分の研究の話をしても学生は居眠りするだけであり、研究と教育を別々の活動として割り切るしかない。フンボルトのこの文句は理想論でしかないし、また、大学で教えた人であれば誰でもが悩むようなごく当たり前のことを言っているにすぎない。フンボルトが発明した近代大学の理念などという大袈裟なものではない。
大切なのは、お題目や「理念」ではなく、具体的・実践的な「教育装置」の工夫である。それまでの「講義」という装置では、上のように研究と教育の一致は実現できない。しかし、文科系では「ゼミナール」、

理科系は「実験室」という装置を使えば、研究と教育の一致は実現できるかもしれない。実際にベルリン大学やアメリカの大学では、このような装置を使って大学教育の実をあげたし、現代の大学教員でも少しは納得できることであろう。そこで、こうした具体的な教育装置のことが出ているのかと思って、この論文を探しても、全く見つからない。フンボルトは大学教育に携わった経験がないのだから、こんな実践上の工夫について書けるわけがない。実際には、ゼミナール（演習）形式の授業は、ベルリン大学だけでなく、周辺の多くの大学ですでにおこなわれていた。また、実験室での教育は、ベルリン大学ではなく、ギーセン大学のリービヒの研究室が最初だという。ゼミナールも実験室もベルリン大学が発祥ではない。

さらに、③教授会の自治権について、それらしいことが書かれているが、実際のフンボルトは、逆のことを考えていたという。つまり教授会の権力に任せるとコネや利権が横行してしまうため、教授会に人事をまかせようとはしなかったという（潮木，2008、242ページ）。つまり、この部分はフンボルトのホンネではない。

このように、この論文に、大学理念を求めて読んでも裏切られるだけである。内容的にみて、近代大学の原点とされるような革新的な構想とは思えない。ごく当たり前のことしか書いていない。とてもフンボルト理念のバイブルといえる代物ではない。

大学の原理は「孤独と自由」であるといった文章もあり（訳書210ページ）、一見深いことを言っているように見えるが、考えてみれば、学生は各自それぞれが努力して学ばなければならないから、孤独なのは当たり前である。

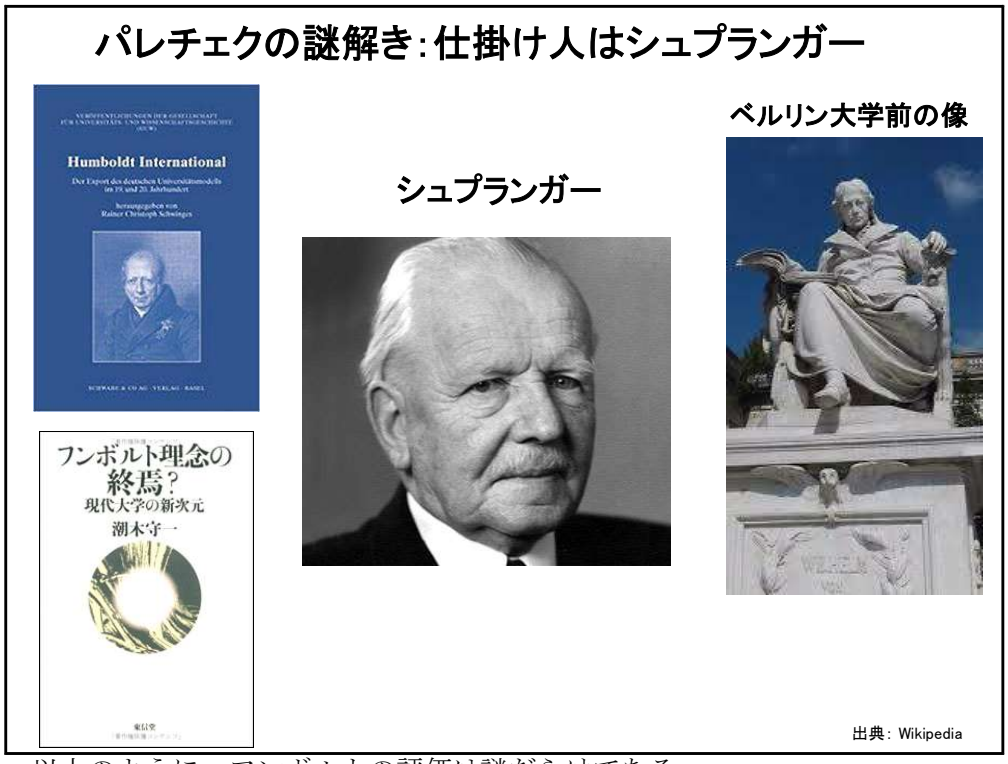
そもそもこの文書は「論文」などと呼べる代物ではなく、未完成の「政治メモ」にすぎないものである。訳書にして13ページしかないペラペラのメモ文書である。このメモは、1809～10年に書かれ、誰の目に触れることもなく埋もれていた。ずっと後になって発見され、90年後の1896年に活字になった。したがって、当時のベルリン大学の人の目に触れたわけではないので、この文書がベルリン大学の創設理念となったという可能性は低い。

実際に、この文書の後半部分は、大学と学術アカデミーの関係について述べたものであり、つまり、アカデミー関係者に向かって大学創立を説得する政治メモなのであって、決してベルリン大学の関係者に向かって理念を述べたメッセージではない。

そもそもこの文書を書いたのはフンボルト自身なのか疑わしい。前述のように、シュライアマハーなどの部下が書いたものかもしれない。

以上のように、大学創設においてフンボルトが果たした役割は小さい。梅根（1973）も、ベルリン大学創設に果たしたフンボルトの役割を高く評価していない。

パレチェクの謎解き：仕掛け人はシュプランガー



以上のように、フンボルトの評価は謎だらけである。

ところが、パレチェクというドイツの歴史学者の論文（Paletschek, 2001）を知って、疑問は氷解した。原論文は入手できなかったが、潮木（2007，2010）が詳しく紹介している。

それによると、1910年、ベルリン大学のシュプランガーが『フンボルトとその教育改革』という本を発表し、それ以来、フンボルト理念という言葉が使われるようになったという。

エドゥアルト・シュプランガー（Eduard Spranger；1882～1963年）は、有名な心理学者・教育学者である。

ベルリン大学でディルタイの指導を受け、了解心理学の立場から「精神科学的心理学」を提唱した。
私のような心理学者にとっては、価値志向によるパーソナリティの６類型（理論型・経済型・審美型・宗教型・権力型・社会型）がなじみ深い。昔の性格心理学の教科書には乗っていたし、私の研究室でもこの理論の質問紙法研究をおこなったことがある。また、シュプランガーは教育学者としても多くの業績を残した。
シュプランガーが『フンボルトとその教育改革』を発表した1910年当時は、弱冠28歳の若き研究者であり、ベルリン大学の私講師であった。1910年という年は、ちょうどベルリン大学創設100周年記念に当たり、ベルリン大学は成功物語が必要とされていた。それに応えるべく、シュプランガーは、当時公刊されたフンボルト全集にもとづいて、100年間も歴史の闇に埋もれていたフンボルトという人物を掘り起こして、彼の大学構想を紹介した。発見されたばかりの論文「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」も再評価された。
このように、ベルリン大学の栄光を正統化するためにフンボルトが発見され、そのときに「フンボルト理念」が創作され、「神話」が作られた。その仕掛け人としての業績により、シュプランガーは1911年には29歳でライプツィヒ大学の教授となり、1920年に38歳でベルリン大学教授となった。

パレチェクの謎解き：精神科学のために作られた神話

シュプランガーの著書が出た1910年以前の書物や論文には「フンボルト理念」という言葉は一度も登場していない。フンボルト理念などという言葉はなく、フンボルトという学者の名前も知られていなかった。もちろん「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」といった文書に注目する人もいなかった。
ところが、シュプランガーの本が出た1910年以降、多くの学者が大学論を書いた。ケーニヒ　（1935年）、ベッカー（1919年、1925年）、ヤスパース（1946年）、シェルスキー（1963年）などである。彼らはフンボルト理念を前面に押し出し、これによってフンボルト理論という神話が定着した。
シュプランガーがフンボルトを賞賛した意図は、「精神科学の復権」であったという。つまり、当時は、自然科学や技術が発展し、精神科学は負けていた。そこで、フンボルトという精神科学の先駆者の功績を讃えることで、精神科学の復権をはかろうとしたのである。それによって学術予算を獲得しやすくしようとした。上で述べたケーニヒやヤスパースなどの学者も、すべて精神科学の学者である。

２つの謎が解けた

パレチェクの仮説を読んでなるほどと納得できた。冒頭の２つの謎は解けた。

第１の謎　なぜベルリン大学はフンボルトを持ち上げるのか？

この大学が、学長でも教員でもないフンボルトを持ち上げる理由は明らかだ。
なぜフンボルト大学なのか。第二次大戦後の東西分割で、ベルリン大学本部は東ドイツ側になった。この大学の正式名は、創設者の国王の名をとってフリードリヒ・ヴィルヘルム大学であったが、東ドイツ政府は王制を否定していたので、誰か有名な学者の名前をつけようとした。そこで、「フンボルト理念」で知られていた兄ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと、自然科学者として有名だったアレクサンダー・フォン・フンボルトの兄弟が選ばれた。こうして、1949年に、この大学はフンボルト大学ベルリンと改称されたのである。それはフンボルト兄弟が建学の理念や学問的影響で尊敬されていたからというわけではない。学長や教授をつとめた学者だと、敵も多いだろうから、かえって逆に、フンボルト兄弟のような、関係のうすい人物のほうが反対者が少なかったからにすぎないかもしれない。
また、フィヒテ大学やヘーゲル大学とすれば文科系に偏るし、マックス・プランク大学やアインシュタイン大学では理科系に偏る。その点、フンボルト兄弟は、兄が文系、弟が理系で、文理のバランスがとれていて都合が良い。ベルリン大学の正門に立つフンボルト兄弟の像が建てられた経緯も、これを裏書きする（西村、1990）。1869年に、弟アレクサンダーの没後10周年を記念して、アレクサンダーの像を建てることを病理学者のウィルヒョウ（後述）が計画した。しかし、アレクサンダーはベルリン大学とは関係がなかったので、大学の許可がおりなかった。そこで、大学創設にかかわった兄ヴィルヘルムと対にすることで許可がおりたという。1883年に除幕式がおこなわれ、生理学者で学長のデュ･ボア･レモンが演説をした。「弟アレクサンダーは自然科学で活躍し、兄ヴィルヘルムは精神科学で活躍した。この兄弟は自然科学と精神科学の境界で出会った」と。こじつけもいいところである。まさに「神話」である。

第２の謎　なぜ「フンボルト理念」は過大評価されるのか？

神話にすぎない「フンボルト理念」が過大評価される理由も明らかだ。
シュプランガーが初めてフンボルト理念を讃えたのは、1910年、ベルリン大学100周年の時である。ベルリン大学は、過去の栄光を正統化するための成功物語を必要としており、そのタイミングでシュプランガーの仮説が出された。シュプランガーの著書は「フンボルト理念」という大きな共同幻想を作り上げて、ベルリン大学関係者の志気を高める働きをした。とくに、自然科学の発展の中で取り残された精神科学の学者にとってそうだっただろう。1949年の改名の時も、「フンボルト理念」が過去の栄光を象徴するものだったので、フンボルトの名前が使われた。
しかし、ベルリン大学は確かに名声を博したが、これは「フンボルトの理念」のためではなかった。そうではなく、個々の教員が評判がよかったこと、建物の外観が壮大であること、最高政治権力の間近に位置を占めていることによるという（梅根,1973）。とくにフィヒテ・シェリング・ヘーゲルというドイツ観念論哲

学のビッグ３がいずれもベルリン大学の教員であったことは、大学の名声を高めた（第２～第５部を参照）。

＜第２章の参考文献＞

潮木守一『ドイツの大学　文化史的考察』講談社学術文庫、1992.
潮木守一『フンボルト理念の終焉？　現代大学の新次元』東信堂，2010.
潮木守一「フンボルト理念とは神話だったのかーパレチェク仮説との対話ー」広場大学高等教育研究開発センター大学論文集，38，171-187．2007.
http://rihejoho.hiroshima-u.ac.jp/pdf/ron/38/74009.pdf
フンボルト（梅根悟訳）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」.『世界教育学選集53　大学の理念と構想』（明治図書､1970）に収録．（『世界教育学名著選９　大学の理念と構想』明治図書、1973にも収録）
梅根悟「解説」『世界教育学名著選９　大学の理念と構想』（明治図書、1973）に収録
Paletschek, S.　Verbreitete sich ein 'Humboldt'sches Modell' an den deutschen Universitäten im 19. Jahrhundert?　in 'Humboldt International: Der Export Des Deutschen Universitatsmodells Im 19. Und 20. Jahrhundert' Rainer Christoph Schwinges, 2001.
森邦昭「フンボルト理念をどう受け継ぐか」福岡女子大学文学部・国際文理学部紀要、76，103-123，2012.
https://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20180325013150.pdf?id=ART0010292258
金子勉「大学論の原点　ーフンボルト理念の再検討ー」教育学研究、76、2009.
斉藤渉「フンボルトにおける大学と〈教養〉」東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」（UTCP）　公開共同研究　「哲学と大学」第3回，2008.
http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/from/blog/%E3%83%AC%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%A120080128_humboldt.pdf
小塩節『ドイツに学ぶ自立的人間のしつけ』あすなろ書房、1988.
石田勇治『図説ドイツの歴史』河出書房新社、2007.

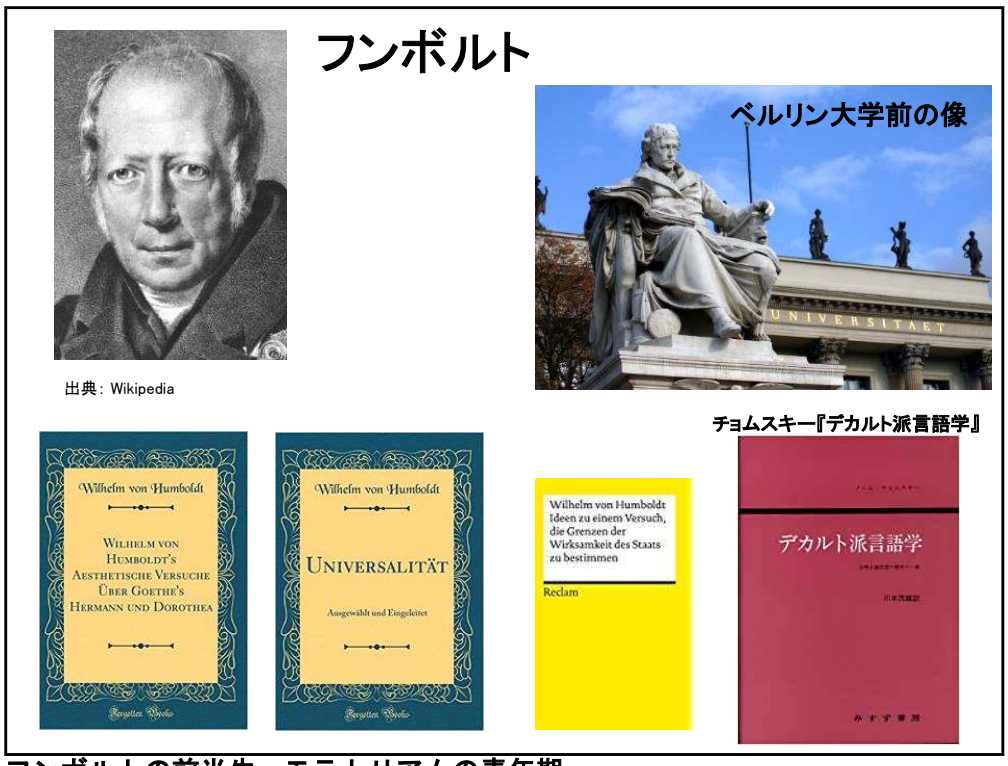
第３章　フンボルト（兄）の神話

＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

フンボルトはベルリン大学の創設者とされている。しかし、フンボルトの評価には納得できないことがたくさんある。これまでベルリン大学の創設の過程を詳しく書いたのは、ひとつは、この疑問への伏線である。

フンボルト（兄）



フンボルトの前半生　モラトリアムの青年期

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt; 1767～1835年）は、ポツダムの貴族フンボルト家の長男として生まれた。自宅で家庭教師カンペに教育を受けた。のちにカンペに連れられてパリに行き、フランス革命の動きを観察した。フランクフルト大学（オーデル河畔）、ゲッティンゲン大学に学んだ。

23歳で裁判所に勤務したが、１年でやめた。諸外国を旅行して見聞を広め、シラー、ゲーテ、フィヒテなどと親交を結んだ。

35歳でふたたび官僚となり、公使としてローマに行き、外交官として７年間を暮らした。といっても、外交官の仕事は二の次であり、ローマで古代の研究に熱中していた。

以上のように、35歳までのフンボルトは、働く必要のない貴族であり、親の金で自由に遊び、ヨーロッパ中を旅して歩いた。何ともうらやましい身分であるが、モラトリアムで根のない前人生だったともいえる。

文化教育局の長官に任命：教育学者としてのフンボルト

しかし、フンボルトの人生が変わるのは、1806年にナポレオンがベルリンを占領してからである。この報をローマで聞いたフンボルトは、ベルリンに戻る。

1809年２月、42歳のフンボルトは、シュタイン首相から、文化教育局 Sektion des Kultus und des öffentlichen Unterrichts の長官に任命された。フンボルトは、この任命を嫌がり、ずっと逃げていたが、立場上どうしても引き受けざるをえなくなった。

長官となったフンボルトは、教育制度改革とベルリン大学創設という２つの大仕事をやってのけた。

しかし、1810年４月には、文化教育局長官を辞した（後任はシュックマン）。この間、１年２ヶ月にすぎない。ベルリン大学が開設した10月には、すでにフンボルトは外交官としてローマに着任していた。当時の首相アルテンベルクは、フンボルトの後任として、弟のアレクサンダーに打診したが、断られたという。

研究三昧の晩年：言語学者としてのフンボルト

その後、フンボルトは外交と政治の表舞台に立った。1814年のウィーン会議に出席するなど、外交官とし

て業績をあげ、内務大臣となった。しかし、首相ハルデンベルクと対立し、1819年、52歳で閣僚を免職された。

政界を引退してからは、ベルリン郊外のテーゲルの館に引きこもった。そこで、言語学の研究に専念し、バスク語、サンスクリット、アメリカ大陸の諸言語などの数多くの言語を研究し、言語の比較研究にもとづいて言語哲学を樹立した。1835年、テーゲル館で死去した。享年67歳。

フンボルトはギリシャ語、ラテン語を初めとして広く全世界の言語に興味を持ち、言語の習得を楽しみ、熱意を捧げていた。彼はスペインのバスク地方のバスク語を深く研究した。また、弟のアレクサンダーが世界中から集めた言語の分析をおこなった。そうした中から、民族による言語の違いについての哲学を作った。

フンボルトは生前まとまった言語哲学の書物は出版しなかったが、『ジャワ島におけるカヴィ語について』という膨大な原稿を残したまま亡くなった。このうち「序論」という部分は８～９割完成してまとまっていた。死の翌年、それを弟のアレクサンダーたちがまとめて出版した。「序論」といっても大部のまとまった論考であり、あとで「人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について」というタイトルがつけられた。これがフンボルトの代表作とされている。

主著『カヴィ語序論』：チョムスキーも注目

世界中の民族によって言語は異なるが、それはどこから出てくるのだろう。これを分析するのに、語彙や文法構造や他の要素を比較することがおこなわれたり、すべての言語に共通する特徴に無理矢理当てはめたりするが、それでは全く不十分である。その民族の精神活動のどんな違いによって、そうした言語の差異を生んだのか、そこまで遡らないといけない、とフンボルトはいう。つまり、日本語を使うときと英語を使うときの精神活動の違いを分析し、それは日本とイギリスの民族的な活動の違いにまで遡って分析しなければならないという。そこまでできれば理想なのかもしれないが、それはかなり困難で実証不能な作業ではなかろうか。

フンボルトは、サンスクリット語と中国語を両極とする尺度上に、あらゆる言語は位置づけられるという。サンスクリット語は「語の統一性の中に、文に対する語の関連性がすでに織り込まれており、この関連性は「屈折」という形で表現される」。一方、中国語は、「幹語を変化させることなく固定したまま言語の中に封じ込めてしまうもので、文中の語はそれぞれが全く孤立している」（亀山、2000）。ただし、これは「理念型」としての話であって、現実のサンスクリット語や中国語をさしているわけではない。このような考え方はカントの哲学を反映しているという。ただ、そのように、現実から離れた「理念型」で議論することが、果たして学問的には意味があるのだろうかと疑問になる。

世界の言語の多様性を考えるに当たって、言語を生み出す精神活動に遡って言語を見るという見方が、後の言語学者に大きな影響を与えたようだ。有名なのは、チョムスキーが『デカルト派言語学』（川本茂雄訳、みすず書房）の中で、彼の生成文法論の源流のひとつとして、フンボルトの言語学をあげていることである。ただし、私には、チョムスキーの生成文法論は、フンボルトのいう「すべての言語に共通する特徴に無理矢理当てはめる」理論のように思えるのだが。

フンボルトの教育行政は本物か

言語学の業績は一流なのかもしれないが、教育学者としてのフンボルトが一流でないことは確信できる。

フンボルトは教育論などには関心を持っていない。それまで教育論の著作を発表したこともなければ、教育の本を１冊も読んだことがないという。大学の教員をつとめたわけでもない。フンボルトは貴族の子弟なので、家庭教師の個人指導を受けて育ったのであり、そもそも学校教育というものを受けたことがないのである。

成り行き上、42歳で教育行政の責任者となってしまった。フンボルトが教育行政や大学行政にかかわったのは、67年の人生のうちで、１年２ヶ月にすぎない（1809年２月～1810年４月）。フンボルトの前半生と教育行政には全く連続性がない。文化教育局をやめてからも、教育の仕事を一切していない。つまり後半生と教育にも連続性がない。

文化教育局時代は、ナポレオンに占領されたベルリンを離れて、ケーニヒスベルクの臨時政府で仕事をしたが、ここで教育行政の勉強をしたわけでもない。フンボルトは、毎朝ギリシャ語かラテン語の勉強をしていたという。金持ちの有名人として、頼まれてイヤイヤ行政の仕事をしていただけであって、教育に熱意を持って打ちこんだ形跡はない。

理想化しすぎるフンボルトの伝記

フンボルトの伝記作者は、フンボルトを理想化しすぎている。それまで経験のない教育行政で業績をあげたのは、フンボルトが天才だったからのように書かれている。あまりに美化されている。言語学者、政治家・外交官、教育学者といったそれぞれ命をかけるような大仕事が片手間で両立できるはずはない。言語学者・哲学者が書いたフンボルトの伝記における教育制度改革やベルリン大学創設の記述は美化されすぎていて、あまり信用がおけない。

適切かどうかはわからないが、これは坂本龍馬ファンと似ている気がする。龍馬のファンが「船中八策」が明治維新の基本となったと考えたがるように、フンボルトの伝記作者はフンボルトの文書をベルリン大学の基本構想文書と考えたがる。しかし、フンボルトが大学創設に果たした役割はそれほど大きくない。

教育制度改革

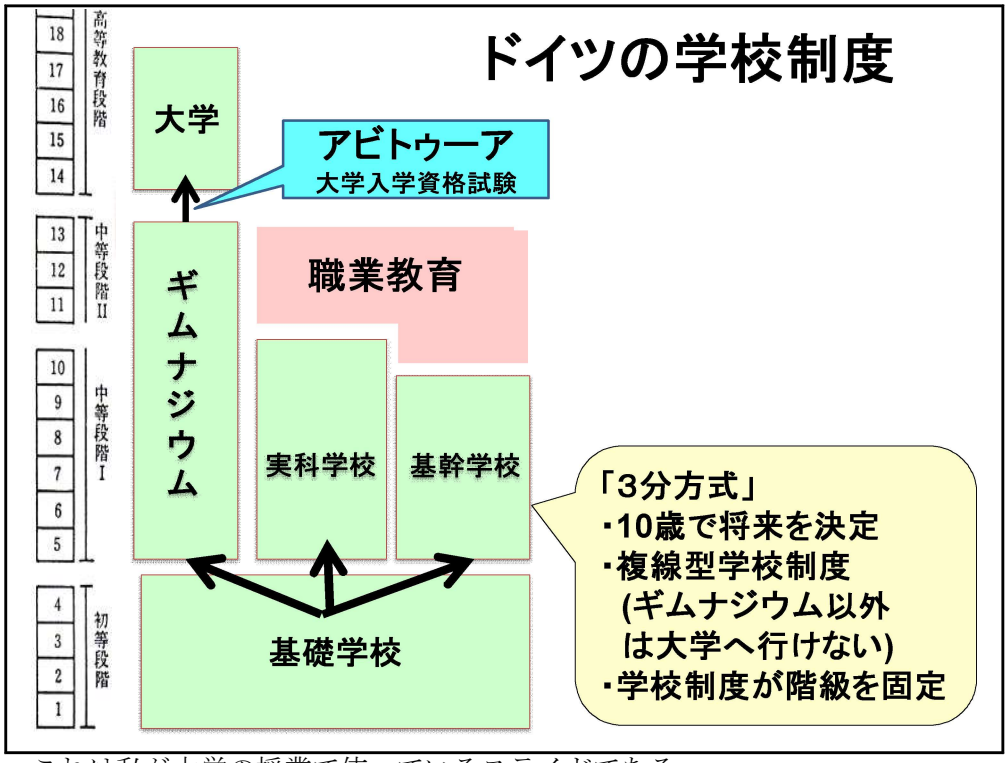
文化教育局長官として、フンボルトは、①教育制度改革と②ベルリン大学創設という２つの大仕事をした。②についてはすでに見たので、①教育制度改革について見てみよう。

ケルン大学の教育学者メンツェは次のようにまとめている。

フンボルトは文化教育局の局長に任命され、16ヶ月の間に全プロイセンの学校制度を抜本的に改革した。これについてはシュプランガーが『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと教育制度改革』（1910年）で詳細にわたって評価した。フンボルトは学校制度について考えた。

ケーニヒスベルクとリトアニアにおける学校計画のなかで、彼は学校に関する新しい見解を展開する。学校の第一の使命は、特定の職業の準備をするのではなく、普遍的な人間を形成すること、と規定している。フンボルトは学校制度を体系化させた。彼はペスタロッチ主義の方針にもとづいた初等教育から、彼の創立した新人文主義によるギムナジウムを経て、彼の創設した大学にいたるまでの直線的な教育軌道をつくった。
出典：メンツェ（ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの人と業績」（フンボルト『人間形成と言語』以文社、1989に収録）

ドイツの学校制度



これは私が大学の授業で使っているスライドである。

ドイツの学校制度は、初等教育・中等教育・高等教育からなる。初等教育（基礎学校）をへて、中等教育では、①ギムナジウム（大学進学学校）、②実科学校（レアール･シューレ）、③基幹学校（ハウプト・シューレ）という３つの学校に分岐する。このうち①ギムナジウムに進んだ者だけが、高等教育（大学）に進学できる。②実科学校と③基幹学校に進んだ者は、大学へは行かずに、職業教育を受ける。これが複線型学校制度と呼ばれ、階級制度を固定する方向に働く。また、ギムナジウムから大学に進む際には、アビトゥーア（大学入学資格試験）を受けて合格しなければならない。アビトゥーアはドイツ国内の統一試験であり、これが日本で実施された共通一次試験（現在の大学入試センター試験）のモデルのひとつとなった。このような学校制度は、もともとプロイセン王国で発達したものであり、それがドイツ全土に広がった。

フンボルトがおこなった教育改革は、初等教育・中等教育・高等教育というもともとあった学校システムを、体系化させたということになる。

そして、初等教育にはペスタロッチの教育理論を導入した。これはペスタロッチの弟子であるツェラーがまわりにいたからである。

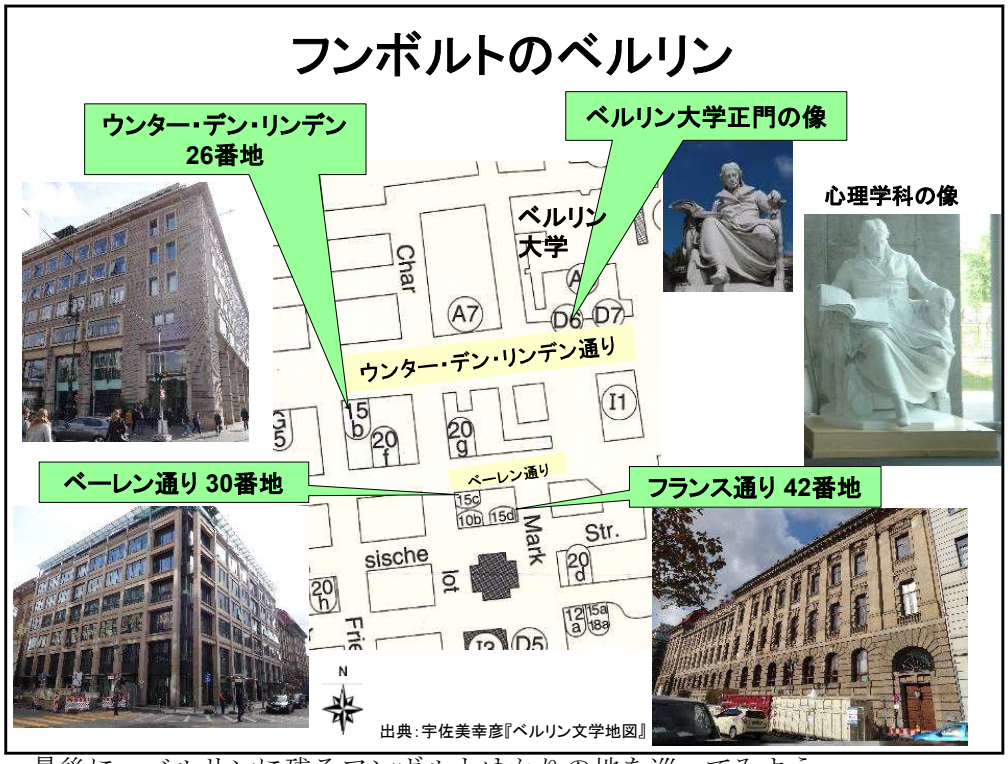
中等教育のギムナジウムについては、人文ギムナジウムという学校を作ったとされる。それまでのギムナジウムはラテン語中心だったので、フンボルトの個人的趣味に合わせて、ギリシア語を重視し、ギリシャ語中心のギムナジウムを作ったということのようだ。

高等教育については、ベルリン大学の創設にかかわり、アカデミーなどとの関係を整備したが、これは前述のように、シュライアマハーの助言によるものであろう。

根本的な疑問として、フンボルトの教育関係の文書は、論文ではなく、政治文書にすぎない。例えば、「ケーニヒスベルク学校計画」と「リトアニア学校計画」という文書をみると、政策メモを詳しくしたようなものであって、当たり前の教育制度が書かれているだけであり、オリジナリティはない。日本で言うと、例えば「宮城県の学校計画」といったローカルな行政文書である。フンボルトは、言語学では鋭い発想があ

ったのかもしれないが、教育行政については、どうみても私にはシロウトにしか思えない。
　そもそもこうした行政文書は、本当にフンボルト自身が書いたものとは思えない。教育行政をおこなっている部下（例えば、シュライアマハーやツェラー）がまとめたものではないか。いつの時代でも、文部大臣は教育者ではなく、ただの政治家である。教育行政の仕事は、部下の官僚がおこなっている。文部大臣は官僚が書いた原稿を読むだけであり、官僚の手柄は大臣がさらっていく。
出典：フンボルト（ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）「ケーニヒスベルク学校計画」「リトアニア学校計画」（フンボルト『人間形成と言語』以文社、1989に収録）

フンボルトのベルリン



　最後に、ベルリンに残るフンボルトゆかりの地を巡ってみよう。
　ベルリン大学の門の両側には、フンボルト兄弟の全身像が立っている。左側が兄ヴィルヘルム、右側が弟アレクザンダーである。兄ヴィルヘルムの像は、マルティン・パウル・オットーが、弟アレクサンダーの像はラインホルト･ベーガスが制作した。日本の山門の竜神、雷神のような学問の守り神のようである。
　兄のヴィルヘルムは、座って、膝に大きな本を広げて、考え事をしている。いかにもまじめに勉強しているという感じである。この像は、ベルリン大学のアドラースホーフ･キャンパスの心理学科にも飾られている（後述）。
　兄のヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、大学のすぐ南側の地域のアパートを借りて住んだ。以下の３つのアパートである。

◆フンボルトの住居

地図上の番号	当時の住所	住んだ時期
15b	ウンター・デン・リンデン26番地	1809～1819年
15c	ベーレン通り30番地	1819～1831年
15d	フランス通り42番地	1831年～

文献：宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008

　フンボルトは1810年にはベルリンを離れ、その後ベルリンに戻るが、1819年に政界を引退し、郊外のテーゲルの館に引きこもった。1810年以降はベルリン大学と関係を持たなかったが、大学付近にアパートは持っていたようだ。
　これら３カ所の跡地を歩いてみたが、このあたりの区割りは当時とほとんど変わっていない。写真に示すように、いずれも現在は新しい建物になっている。説明板のようなものは見当たらなかった。

テーゲル館　（フンボルトの屋敷と墓）

　フンボルトは、1819年、52歳で政界を引退し、それからベルリン郊外のテーゲルの館に引きこもって研究三昧の生活を送った。

　現在、テーゲル館は、フンボルトの記念館となり、一般公開されている。私はまだ行ったことがないが、Uバーンのアルト･ベルリン駅から歩いて行ける。この地図には、「フンボルト島」という地名も見て取れる。

　敷地内には、フンボルト兄弟の墓もある。

＜第３章の参考文献＞

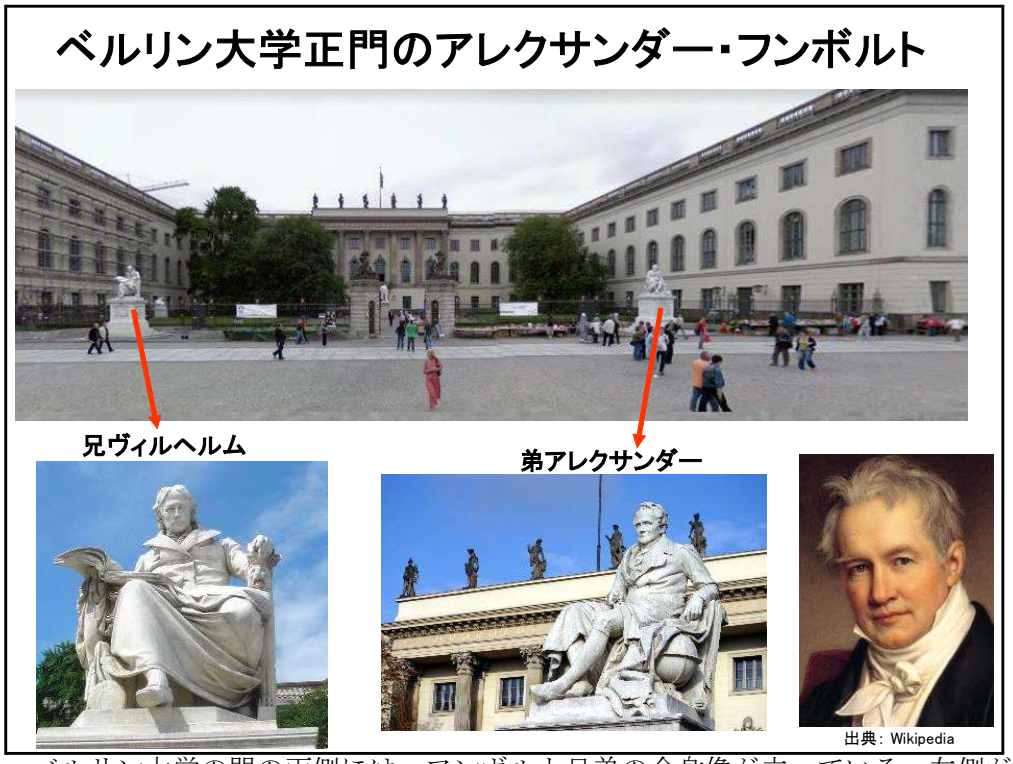
西村貞二『フンボルト　人と思想』清水書院、2015.
亀山健吉『フンボルト　文人・政治家・言語学者』中公新書、1978.
亀山健吉『言葉と世界　ヴィルヘルム･フォン・フンボルト研究』法政大学出版局、2000.
泉井久之助『フンボルト』 弘文堂書房、1938.
泉井久之助『言語研究とフンボルト』 弘文堂、1976.
フンボルト（メンツェ編、ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳）『人間形成と言語』以文社、1989.
石田勇治『図説ドイツの歴史』河出書房新社、2007.

第４章　補論　フンボルト（弟）

＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

ベルリン大学正門のアレクサンダー・フンボルト



ベルリン大学の門の両側には、フンボルト兄弟の全身像が立っている。左側が兄ヴィルヘルム、右側が弟アレクザンダーである。兄ヴィルヘルムの像は、マルティン・パウル・オットーが、弟アレクサンダーの像はラインホルト･ベーガスが制作した。日本の山門の竜神、雷神のような学問の守り神のようである。

兄のヴィルヘルムは、座って、膝に大きな本を広げて、考え事をしている。弟アレクサンダーは、地球儀の上に座っている。

弟アレクサンダーは自然科学者として有名で、近代地理学の祖とされる。当時は、兄よりも弟のほうが学問的な名声は高かった。大学正門に兄弟の像が並んでいたり、この大学名がフンボルト大学と改名された背景には、弟アレクサンダーの名声があった。

兄弟の異動をまとめると表のようになる。

◆フンボルト兄弟の比較

	兄ヴィルヘルム	弟アレクサンダー
専門	精神科学　言語哲学	自然科学　近代地理学の祖
家族	妻と多くの子ども	生涯独身
晩年	テーゲル館に閉じこもって研究に没頭。生前は著書を出さず。	社交的で多くの人と接し、生前から名声が世界中に広がる
死後	死後に言語哲学が高く評価された（100年後シュプランガーにフンボルトの大学理念として祭り上げられる）	死後も名声は尽きず。ウィヒョウが銅像を計画
共通点	親の遺産で生活し、旅行好き。外交官の仕事。有名人との交流。大学教員などの職につく必要なし。	

親の遺産で海外旅行

アレクサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt；1769～1859年）は、貴族フンボルト家の次男として、ベルリン市内で生まれた。２歳年上の兄とともに、自宅で家庭教師カンペに教育を受けた。兄と同じく、フランクフルト大学（オーデル河畔）、ゲッティンゲン大学に学んだ。大学時代に、クックの

探検隊の隊員だったフォルスターと知り合い、いっしょにヨーロッパ旅行をしたことが世界探検へのきっかけとなった。
　その後、フライベルク鉱山専門学校で学び、22歳で、鉱山管理の役人となった。私費で鉱山訓練の学校を作るほど打ち込んだ。ここで鉱物など自然学への学問的関心を強めた。
　27歳の時に、母が亡くなり、兄弟は莫大な遺産を相続した。遺産の利子のほうが、鉱山の役人の収入の６倍になったという。当然、アレクサンダーは、役人の仕事をやめて、利子で生活する方を選んだ。兄のヴィルヘルムはこの資金をヨーロッパ旅行に当て、弟アレクサンダーは世界探検旅行につぎ込んだ。何ともうらやましい人生である。

新大陸の熱帯地域への旅行

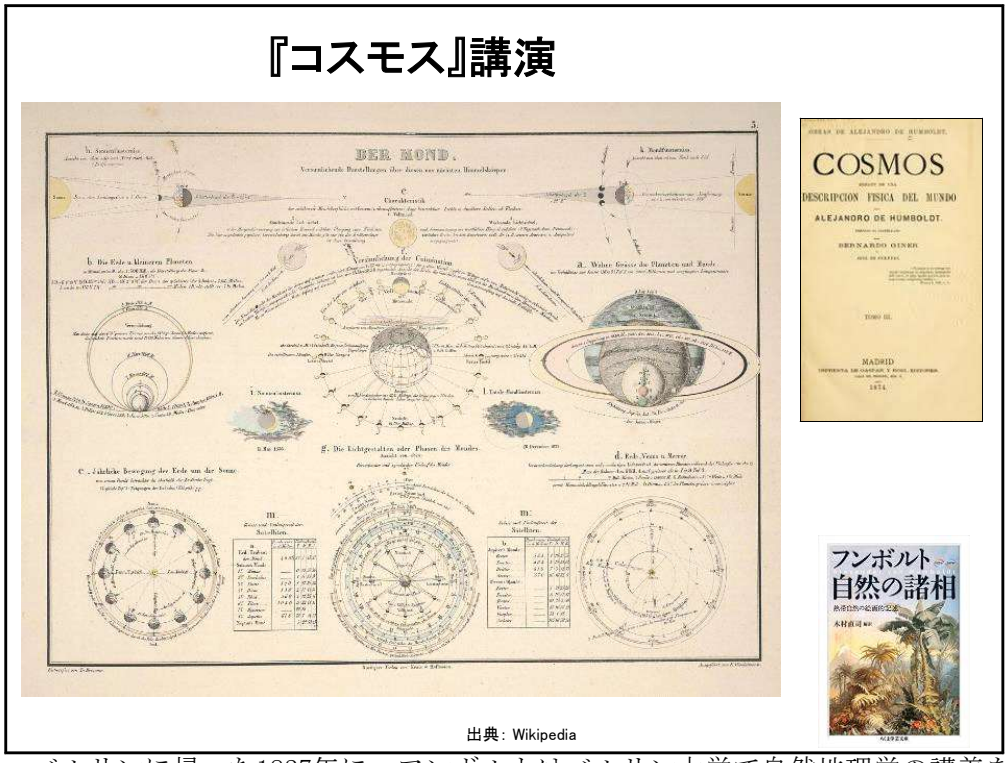
　アレクサンダーは、はじめナポレオンのエジプト遠征隊に随行する学術調査隊に参加しようとしたが、許可がおりずに断念した。このため私費での調査旅行に切り替えた。
　スペイン国王と会い、アメリカのスペイン植民地での無制限の旅行が許された。
　1799年、29歳で、アレクサンダー一行は、スペイン領アメリカへ向かった。ベネズエラ、キューバ、アンデス山地、メキシコ、アメリカ合衆国を回り、ヨーロッパに戻った。旅行は1804年まで５年以上に及んだ。この間、天文学･地理学・地質学・植物学・動物学・人類学など、あらゆることに関心を向け、これらの情報を総合した博物学をめざした。アメリカのあらゆるデータを集めた。
　旅行中に、彼は死亡したと新聞に書かれたため、無事に戻ったときには、凱旋将軍のように歓迎された。とくにフランスで彼は熱烈な歓迎を受けて、ナポレオンにも謁見できた。
　しかし、35歳でベルリンに帰ると、それほどの歓迎ではなかった。彼は体調を崩した。
　帰国後、アレクサンダーは、アメリカ旅行の成果を出版することに一生をかけた。完璧主義者で、あらゆることに手を抜かなかったので、『新大陸の熱帯地域への旅行』全30巻が完成したのは、30年後の1834年のことであった。アレクサンダーは65歳になっており、財産すべてを出版につぎ込んだ。

パリで20年間国際人として活躍

　この頃、外交の手伝いで、アレクサンダーはパリに行く機会があった。はじめはナポレオンからスパイと疑われて監視されたという。しかし、パリでの生活はアレクサンダーにとって非常に快適であったので、彼は38歳から57歳まで、20年間もパリに暮らすことになった。パリで旅行の成果をフランス語で出版した。
　アレクサンダーは、コスモポリタン（国際人）として仕事した。これによって、パリに集まる世界中の名士と交流し、科学者としての名声は広まり、「ナポレオンに次いで有名な人物」とか「19世紀前半で最も名前の知られたドイツ人」などと称された。
　しかし、その一方で、ドイツ人からは批判された。当時のドイツ（プロイセン）は、前述のように、ナポレオンがベルリンを侵略し、フランスに対する恨みが強く、ナショナリズムが盛んになった時期であった。敵国フランスで活躍するアレクサンダーに対して、プロイセンでは批判が強くなった。兄ヴィルヘルムも、ベルリンに帰ることを勧めた。
　1810年に、兄のヴィルヘルムが文化教育局長官を辞めたとき、首相アルテンベルクは、その後任として、弟のアレクサンダーに打診したが、断られたという。当時、アレクサンダーは、パリで旅行の成果をまとめていた時期だったので、それどころではなかった。断る理由としては、「パリにくらべてベルリンの気候は

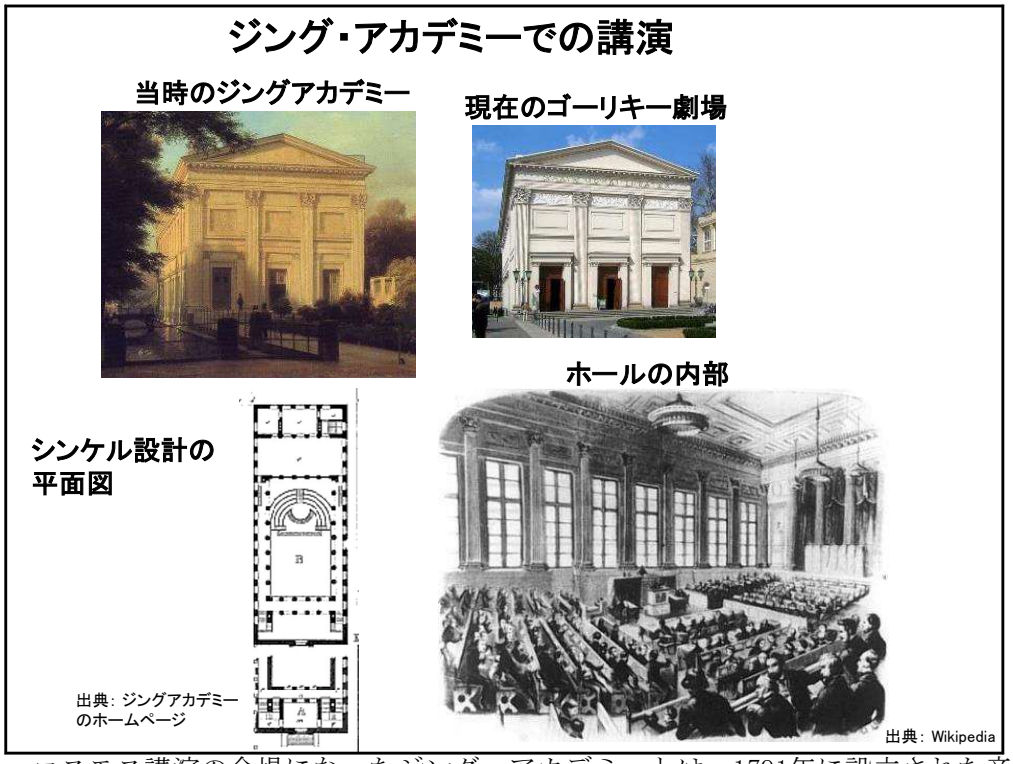
寒く、健康を考えると自分には合わない」ということだった。
　しかし、プロイセン王の命令によって、1827年、57歳で、ベルリンに帰った。ただし、その後のパリにはたびたび行っていた。

『コスモス』講演



　ベルリンに帰った1827年に、フンボルトはベルリン大学で自然地理学の講義をおこない、これは後に「コスモス講演」と呼ばれた。
　また、同年、ジング・アカデミーでも同じタイトルで、1200名の一般大衆に対して、16回、無料で連続講演をおこなった。その内容は、銀河系や星雲の話から始まり、惑星、地球、地殻、大気、海、動物、人間、人種、民族、歴史へと続く壮大なものであり、自然科学・博物学の話題を網羅したものである。自然科学の知識の大衆化をはかった点で、ドイツの社会教育史上でも画期的なことだった。
　この講演はのちに『コスモス』全５巻として出版されたが、最終巻が出版されたのは35年後の1862年のことであり、彼の死後３年たっていた。

ジング・アカデミーでの講演



　コスモス講演の会場になったジング・アカデミーとは、1791年に設立された音楽協会で、ジングSingとは

歌のことである。1827年に国王から土地を寄贈されて、コンサートのための建物が建てられた。ここがベルリンの主要なコンサートホールとなり、パガニーニやシューマン、ブラームスといった音楽家たちが演奏会をおこなった。

この建物は、ベルリン大学の東隣りにあり、ノイエ・ヴァッヘ（後述）の北側にある。第二次大戦で破壊されたが、東ドイツ時代に修復され、ロシアの作家ゴーリキーの名前をとってゴーリキー劇場と改称されている。写真を比べるとわかるが、フンボルト時代（左上の写真）と現代（右上の写真）で外観はほとんど変わっていない。建物は、有名な建築家シンケルの原案（左下の設計図）をもとに、建築家オットマーが設計し、1827年に完成した。建物の中には大ホールがある（右下の写真）。完成したばかりの新しい大ホールでフンボルトは講演をおこなったことになる。

この建物は、1948年にはプロイセン国会としても用いられ、右下の写真はその様子を描いたものである。

学者の理想の生活：書斎のアレクサンダー・フォン・フンボルト

図書室のアレクサンダー・フォン・フンボルト

出典：Princeton大学ホームページ

1856年、87歳のアレクサンダーを描いた有名な絵がある。風景画家ヒルデブラントが描いた水彩画「自分の図書室のアレクサンダー・フォン・フンボルト」Alexander von Humboldt in seiner Bibliothekである。絵の右下に「E. Hildebrant. Berlin 1856」という署名が見える。晩年に住んでいたオラニエンブルガー通り67番地の自宅の図書室を描いている。

左側にアレクサンダーが、緑の椅子に座っている。手に書類を持って、こちらを見て微笑んでいる。部屋の中央には絨毯が敷いてある。左側の壁には10段の本棚があり、本が詰まっている。その前には大きな木の作業机があり、地球儀や本や丸めた地図類で散らかっている。

絵の右側に窓があり、明るい光が差している。右側の壁には額縁がかかっている。絵の内容はわからないが、古代の神殿の柱、裸婦像、風景画などのようだ。彼の後ろの机には、本が積んであり、彫像も置かれている。右下の床には、封印してある小包や開封された小包が転がっている。

中央には、ドアがあり、向こう側も図書室である。そこには虎の皮が敷いてあり、机の上には数羽の鳥や小動物の剥製がのっている（遠くから見ると人のように見えるが、拡大すると剥製である）。

非常に印象深い絵であり、見ていると落ち着く。部屋の雰囲気は静かで、ひとつの閉じたミクロコスモスを形成している。しかし、本や資料の散らかり具合や小包などから、彼の活発な知的活動がうかがえる。ある意味で、学者の理想の生活を描いた絵である。

晩年のアレクサンダーの多忙な生活

しかし、静かな図書室での好々爺という雰囲気とは違って、アレクサンダーは多動であり、晩年になってもきわめて活発に動き回った。

59歳のアレクサンダーは、ロシア皇帝の依頼をうけて、鉱物資源調査のために、ロシア・シベリア・中央アジアの調査旅行に出かけた。６ヶ月の大冒険旅行を60歳でおこなったことは驚くべきことである。

65歳で、若い頃のアメリカ大陸旅行の報告書『新大陸の熱帯地域への旅行』全30巻をやっと完結させた。

67歳で、兄のヴィルヘルムが亡くなった。

1848年にヨーロッパで革命が広がり、ドイツでも３月革命が起こり、ベルリンで市街戦がおこり、多くの犠牲者が出た。79歳のアレクサンダーは、宮殿のバルコニーから騒乱の鎮静を呼びかけた。犠牲者の追悼行列に参加した。この時に、のちに偉大な病理学者となるルドルフ・ウィルヒョウが（後述）は３月革命に参

加し、大学をクビになった。アレクサンダーはウィルヒョウの側に立って当局に働きかけた。ウィルヒョウはベルリンを離れ、ヴュルツブルク大学に職をうることができた。こうした恩があったので、前述のように、後にウィルヒョウは、アレクサンダーの像を建てることになったのである。
1859年にアレクサンダーは自宅で生涯を終えた。享年89。

手紙魔と社交性

アレクサンダーは生涯に５万通の手紙を書いたという。その理由は、調査旅行中に資料がなくなる可能性もあるため、手紙という媒体を使って、情報を転送し資料を保存したからという。それにしても５万通とは何という手紙魔だろうか。年になおすと、１年間に2000通の手紙を書き、3000通の手紙を受け取ったことになるという。桁違いの社交性を示している。晩年でも一年間に1000通の手紙を書いていたという。
晩年になっても、毎日、洪水のような訪問客があったという。
アレクサンダーが関心が薄かったものは３つあったという。①宗教、②愛情、③音楽である（佐々木，2015，210頁）。彼は生涯独身で、男性との交友を好んだという。伝記作者によっては、彼を同性愛者だったとする者もいるが、一方で、そうではなく仕事のために家族を作らなかったのだとする者もいる。

フンボルト像の歴史的変遷と多面性

アレクサンダーは多彩な人であり、その人物像は死後に変化してきた（前田,2008年）。
①存命時は、旅行家・冒険家として有名であった。
②次に自然科学者としての評価が高くなった。総合科学としての人文地理学の祖、生態学の祖とされ、地球をひとつのシステムとして把握する姿勢は「フンボルト科学」とも呼ばれたりした。
③第二次大戦後には、アメリカ大陸研究者、スペイン領アメリカの植民地社会の観察が評価された。フンボルトの著作はラテンアメリカ独立を担った人たちに影響を与えたことが注目された。
④政治的には自由主義者として評価された。前述のように、ウィルヒョウは、アレクサンダーの進化論者として彼を評価した。東西ベルリンが分裂した後、西ベルリンでは、アレクサンダーの自由主義的・コスモポリタン的な生活が評価された。一方、東ベルリンでは、彼は科学的社会主義の先駆者、反植民地主義者として評価された。右からでも左からでも、別の側面が評価されるという彼の多面性が、ベルリン大学における彼の過大評価のもとになっているのだろう。
⑤最近では、同性愛者としての少数者への配慮の側面も注目されるようになったという。
アレクサンダーの影響は世界に及んでいる。今でも、フンボルト海流とか、フンボルトペンギンなど、世界には彼の名前をつけた地名や生物名がたくさんある。アメリカには、フンボルトと名前のつく地形や場所が50カ所以上あるという。月にすら、「フンボルト海」というクレーターがある。
ダーウィンへの影響も有名である。ダーウィンは、アレクサンダーの『新大陸の熱帯地域への旅行』を読んで感銘を受けた。それがビーグル号乗船へとつながった。『ビーグル号航海記』では、フンボルトに多く言及している。

フンボルトと日本

日本とも関係がある（西川,2008）。アレクサンダーはシーボルトと関係があった。シーボルト（1796～1866年）はドイツ生まれの医師で、1823年に来日し長崎の出島のオランダ商館医となった。鳴滝塾を開き、日本人に西洋医学育をおこなったが、1828年に帰国する際に日本地図を持ち出そうとしたことがバレて、国外追放処分となった（シーボルト事件）。オランダに帰り、日本を紹介する本『日本』全７巻を出版し、日本学の祖といわれた。その後、日本は開国したので、シーボルトの追放令も解かれ、1859年に再び来日した。その出発する57歳のシーボルトに対して、89歳のフンボルトは激励の手紙を書いている。シーボルトの日本紹介記とアレクサンダーの新大陸紹介記は、ほぼ同時期であり、当時のヨーロッパ人の異国趣味を刺激するものであった。
幕末の日本で初めにフンボルトの名前が出てくるのは、地理学者の箕作省吾が1845年に出した『坤輿図識』（こんよずしき）という本で、この本は吉田松陰の愛読書だったという。また、榎本武揚の『シベリア日記』（1939年）という本にもフンボルトの名前があるという。

アレクサンダー・フンボルトのベルリン

ベルリンには、アレクサンダー・フォン・フンボルトにゆかりのある場所が多い。

①生家

彼が生まれたイェーガー通り22番地には、記念プレートが貼られ、下記のように書かれている。

An dieser Stelle stand das
Geburtshaus des grossen deutschen
Naturforschers und Mitgliedes
der Akademie der Wissenschaften
Friedrich Wilhelm
Alexander von Humboldt
geb. 14.9.1769 gest. 6.5.1859

②ベルリン大学前の像

前述のように、ベルリン大学の正門にはアレクサンダーの像がある。

この像は、ベルリン大学のアドラースホーフ・キャンパスの地理学科にも飾られている（後述）。

③ジング・アカデミー

ベルリン大学の北東側にマキシム・ゴーリキー劇場があるが、ここがジング・アカデミーだった建物である。前述のように、ここで『コスモス』講演をおこなった。

④死ぬまで住んだ家

ベルリンに帰ってきたアレクサンダーが、その死まで住んでいたのは、オラニエンブルガー通り67番地である。前述のように、この建物の図書室で、画家のヒルデブラントがアレクサンダーの絵を描いた。現在、記念プレートが貼られ、下記のように書かれている。

Hier wohnte
von 1843
bis zu seinem Ende
Alexander von Humboldt
geb: 14•IX•1769•
gest: 6•V•1859•
Seinem Andenken
die Stadt Berlin
1901•

⑤テーゲル館

テーゲル館は、前述のように、兄ヴィルヘルムの住居で、そこにはフンボルト家の墓地がある。アレクサンダーも、兄とともにこの墓地に眠っている。

＜第４章の参考文献＞

佐々木博『最後の博物学者 アレクサンダー＝フォン＝フンボルトの生涯』 古今書院 2015年.
手塚章（編）『続・地理学の古典　フンボルトの世界』 古今書院 1997年.
ボッティング（西川治・前田伸人訳）『フンボルト 地球学の開祖』東洋書林、2008年.
前田伸人「訳者まえがき」. ボッティング『フンボルト 地球学の開祖』（東洋書林、2008年）に収録.
西川治「A・フンボルトと日本－幕末から昭和にかけて」. ボッティング『フンボルト 地球学の開祖』（東洋書林、2008年）に収録.

第５章　シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

＜目次＞

第１章	ベルリン大学創設のドラマ
第２章	フンボルト理念の神話
第３章	フンボルト（兄）の神話
第４章	補論　フンボルト（弟）
第５章	シュライアマハー　ベルリン大学の影の創設者

ベルリン大学創設の黒幕だったフリードリヒ・シュライアマハー（Friedrich Schleiermacher; 1768～1834年）についてみてみよう。シュライアマハーは、近代神学の父とされる神学者であるが、最近では、精神科学的教育学の祖、解釈学の父などとも称されるようになり、幅広い領域で活躍した知の巨人である。ベルリン大学でフィヒテやヘーゲルと対立したことでも知られている。日本にも大きな影響を与えており、戦前から彼に関する本が多く出ている。

シュライアマハーは、とても多動な人であり、その人生は起伏に富んでいて面白い。実は私は本論を書くまで、シュライアマハーについてほとんど知らなかったが、ベルリン大学創設の黒幕ということを知り、調べていくうちにその面白さを知った。1810年に43歳でベルリン大学教授となるまでの前半生は、転々と住む場所を変えた。教授となってからの後半生は、66歳で亡くなるまでベルリン大学の発展に尽くした。

ディルタイによる伝記『シュライアーマッハーの生涯』（1870）では、下の表のように、５つの時期に分けている。ただし、ディルタイの伝記は第４期のハレ大学時代までで未完に終わっており、第５期の名前は私がつけたしたものである。

◆シュライアマハーの人生　　ディルタイ（1870）の伝記による区分

時期	年代	タイトル	場所
第１期	1768～1796年	青少年時代と最初の人間形成	ブレスラウ、シュロビッテンなど
第２期	1796～1802年	自らの世界観を生き生きと叙述した時期	ベルリン
第３期	1802～1804年	シュトルプでの孤独 プラトンの再興と新しい倫理学の批判的な準備	シュトルプ
第４期	1804～1807年	ハレー大学－体系－キリスト教との対決	ハレ
第５期	1807～1834年	ベルリン　大学創設と教授として	ベルリン

以下、彼の伝記で最も面白かった増渕（2000）を中心に、深井（2016）、梅根（1961）、木場（1995）、ディルタイ（1870）などを参考にして、彼の人生を辿ってみたい。

シュライアマハーという呼び方について

彼の名前 Schleiermacher の表記は、時代によって異なり、戦前は「シュライエルマッヘル」と書かれ、私は「シュライエルマッハー」と習ったが、その後、シュライアーマッハーと変った。最近では、日本シュライアマハー協会が「シュライアマハー」で統一しようと提案しており（原音に近い簡明な日本語表記として）、ここでもそれに従うことにする。

第１期「青少年時代と最初の人間形成」期

牧師をめざした青年時代

シュライアマハーは、ブレスラウ（現ポーランド領ヴロツワフ）で、教会の牧師の家に生まれた。父親がヘルンフート派（敬虔な信仰を守るキリスト教の共同体運動）に入っていたので、息子たちもヘルンフート派の学校に進むことになった。シュライアマハーは、聖職者になるために、ニースキーにあるヘルンフート派の修道院付属学校から、バルビーBalbyにある神学校（説教者養成学校）に進んだ。こうした神学校は、ヘルマン・ヘッセが『車輪の下』で描いたシュトゥットガルトの神学校と同じ性格の学校である。

このままいけば牧師の職が約束されていたが、この学校では、カントの著作を読むことも制限されるなど、監視がきついこともあり、シュライアマハーは、18歳の時に、神を信じられなくなり、大学で勉強したいと父に伝え、不和となった。このとき、叔父（母の兄）でハレ大学の教員をしていたシュトゥーベンラウフの仲介で、父と和解し、許可を得てハレ大学で勉強することになった。

ハレ大学では、神学部に登録したが、神学の勉強よりも、カントやギリシャ哲学に没頭した。しかし、２年で学資が続かなくなり、ハレ大学をやめた。

1789年、フランス革命がおこった年、シュライアマハーは大学を去り、神学第一次試験を受けて合格した。

ドーナ伯爵家の家庭教師

ギムナジウム（大学進学学校）の教員のポストを探したが見つからなかったので、シュライアマハーは、22歳で、貴族ドーナ伯爵の次男の家庭教師としてシュロビッテンに赴いた。ドーナ家で、シュライアマハーは初めて上品で幸福な家庭生活に触れた。シュライアマハー自身は、小さい頃から神学校の禁欲的な生活をしていたので、家庭の温かさというものを知らなかったのである。彼は２年半、家庭教師の仕事をすることになった。

シュライアマハーは、ドーナ家の長男アレクサンダー（写真左）と親交を結んだ。のちにアレクサンダーは、ベルリンのヘルツのサロン（後述）を紹介したり、内閣に入りそこでシュライアマハーやフンボルトのベルリン大学創設を支えたり（前述）、シュライアマハーの人生において重要な役割を果たすことになる。

また、シュライアマハーは、ドーナ家の次女、17歳のフリーデリケ（写真右）に恋をした。彼は「精神および肉体の魅力と優雅とについての、かつて考えていたすべてのもの」をそこに現実的に見いだした、と姉への手紙に書いている。ちなみに、シュライアマハーが愛情を捧げた多くの異性の中で、フリーデリケは、最初で、しかも唯一の未婚の女性だった。他はいずれも既婚の女性だったのである（木場､1995）。

しかし、のちに、雇い主の伯爵と伯爵夫人と教育についての意見が対立し、25歳でこの職を辞した。

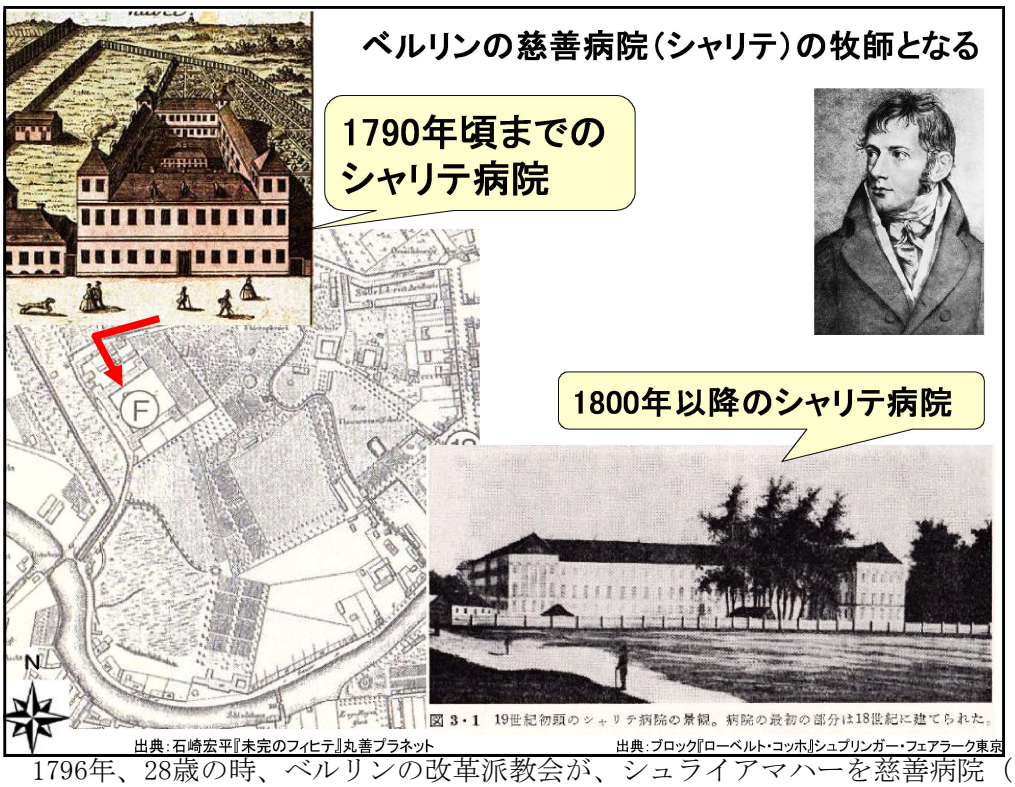
その後１年間、シュライアマハーは、教員養成学校の教師補となり、ギムナジウムでも教えた。

26歳で、神学試験に合格し、牧師シューマンの教会で牧師補となり、教会の訓練を受けた。

ここまでが、ディルタイの伝記では、第１期「青少年時代と最初の人間形成」期である（上の表参照）。

第２期「自らの世界観を生き生きと叙述した時期」

ベルリンの慈善病院（シャリテ）の牧師となる



1796年、28歳の時、ベルリンの改革派教会が、シュライアマハーを慈善病院（シャリテ）付きの牧師に任命した。こうしてシュライアマハーは1796年から1802年までの６年間をベルリンですごし、活発に行動した。ディルタイの伝記では、第２期「自らの世界観を生き生きと叙述した時期」である。

彼は、啓蒙主義的な神学者シュパルディングと接近し、伝統的な教会制度に対して批判的になった。啓蒙主義は、キリスト教という宗教は否定しないが、教会制度を批判し、「教会なしのキリスト教」を提唱した。

シャリテ（慈善病院）とは、1709年にフリードリヒ１世がペスト患者のための隔離施設として作られた病院である。その後、救貧院や陸軍病院として使われた。

シュライアマハーがやってきた1796年頃のシャリテは、この地図に示すように、まわりは荒野であり、城壁の外にぽつんと病院が建っていた。街からの道は舗装されていない。伝染病から街を隔離するために、城壁の外に建てられたからである。左下の絵に示されるように、２階建てで、中庭を囲むコの字型の造りであり、四隅に見張りの塔が建っており、要塞のようである。

病院の敷地内に、ルター派と改革派の説教者の宿舎があった。とても質素な建物であり、そこにシュライアマハーは住んだ。

病院は1785年から立て替えがおこなわれており、改築が進むと、シュライアマハーは宿舎を明け渡して、別の住まいに移らざるを得なかった。このようなゴタゴタもシュライアマハーを悩ませたという（ディルタイの伝記、邦訳342頁）。

こうして立て替えられた新しい病院は、右下の写真のように、３階建てのすっきりした建物となり、要塞のような感じはなくなり、当時の近代的病院建築となった。

シャリテ（慈善病院）は、1810年にベルリン大学医学部が創立されると、初代医学部長フーフェラントが病院長を兼ねて、医学部附属病院となった。現在は、当時の建物はなくなったが、シャリテという名前は残り、ベルリン市民から親しまれている（後述）。

ベルリンで生き生きと哲学する

シュライアマハーの人生において、ベルリンという場所は、輝いている。ベルリン時代のシュライアマハーの青春時代が最も面白い（木部、1995）。ベルリンで彼は生き生きと哲学する。これだけ多動な彼も、ベルリンには長く住んでいる（ベルリンの中で動き回っているから）。ベルリンは、シュライアマハーにとって、刺激に満ちており、人生の転換点になった。それだけベルリンという都市は、知識人を活性化させる刺激に満ちている。

ヘンリエッテ・ヘルツのサロン

当時のベルリンでは、有名なヘンリエッテ・ヘルツのサロンに知識人が集まっていた。ヘンリエッテ・ヘルツ（1764～1847年）は、ユダヤ人の医師のもとに生まれ、15歳の時に、医師で学者（カントの弟子）のマルクス・ヘルツと結婚した。ヘンリエッテはたいへんな美貌で豊かな知的才能を持ち合わせていた（言語学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトにヘブライ語を教えたほど）。ヘンリエッテのサロンはベルリンで最も有名なものになり、シュレーゲル兄弟、フンボルト兄弟、フィヒテなど、ベルリンを代表する思想家が出入りしていた。ヘンリエッテ・ヘルツのサロンは、1795～1806年までは、ノイエ・フリードリヒ通り22番地にあった。

宇佐美（2008）によると、ヘンリエッテのサロンは、1780～1795年まではシュパンダウ通り53番地にあったが、1795年にノイエ・フリードリヒ通り22番地に移った。1803年には夫マルクスが亡くなった。ノイエ・フリードリヒ通りのサロンは、1806年のナポレオンのベルリン占領で封鎖された。これによりヘンリエッテはベルリンを離れていたが、のちにベルリンに戻った。1817年にユダヤ教からキリスト教に改宗したが、その時洗礼を受けたのは、親しかったシュライアマハーではなく、別の牧師であった。改宗がセンセーショナルに扱われるのを恐れたからという。晩年は、マルクグラーフェン通り59番地でサロンを開いた。

このヘンリエッテのサロンにシュライアマハーは出入りするようになった。サロンに紹介したのは、前述のドーナ伯爵の長男のアレクサンダーであった。

このサロンで、シュライアマハーはヘンリエッテと恋仲になる。右下の絵は、ヘンリエッテのサロンで議論するシュライアマハーとヴィルヘルム・フォン・フンボルトを描いたものである。後ろで立っている黒髪の若者がシュライアマハーであり、右から２番目の優雅な夫人がヘンリエッテだろう。ヘルツ家は、ベルリンのティーアガルテン通り18番地に夏の別荘を持っており、その別荘で、ヘンリエッテとシュライアマハーは週に一日はいっしょにすごしたという。

なお、右下の絵に描かれた女性のひとりはラーヘルであり、シュライアマハーは彼女とも親しかった。ラーヘル・ファルンハーゲン（Rahel Varnhagen; 1771～1833年）は、ユダヤ人でのちの1820年代にベルリンに文学的サロンを開いて、ロマン主義の中心地となった。

森鴎外との意外な接点

シュライアマハーは、この地図に示すように、シャリテの宿舎から、ヘンリエッテのサロンまで、夜な夜な歩いて通ったと考えられる。貧しい牧師であるから、馬車を雇うお金はない。直線距離にして約２キロの道のりである。現在でいうと、ベルリン中央駅からアレクサンダー広場駅まで、Ｓバーンで３駅分である。通うのもたいへんだっただろう。

この地図を見ていて気がついたが、これは森鴎外が第１の下宿から衛生学研究所に通った道のりとほとんど同じである。あとで詳しく述べるが、シュライアマハーの時代から90年後の1887年に、鴎外はシャリテの近くに下宿し、そこからクロイスター通りにあるコッホの衛生学研究所に通った。約２キロ、30分の道のりを歩いて通っていたが、遠すぎたために、２ヶ月で下宿を引っ越して、研究所の近くに移った。それほどこの距離は大きかったのである。しかし、恋するシュライアマハーにとってはこの距離も苦にならなかったかもしれない。

ちなみに、ヘンリエッテのサロンがあったノイエ・フリードリヒ通りのガルニゾン教会において、『舞姫』のエリスのモデルとなったエリーゼと鴎外が出会うのである（後述）。

ロマン主義思想のシュレーゲルに心酔

シュライアマハーは、ドロテア・ファイト（後述）という女性が開いている「水曜会」という読書会に通

っていた。この会で、彼は、シュレーゲル（弟;1772～1829年）と知り合った。シュレーゲルは当時25歳で、シュライアマハーより４歳年下だったが、すでにドイツ・ロマン主義を代表する文学者・思想家として知られていた。シュレーゲルは天才肌であり、文学や思想の話をするうち、シュライアマハーは彼に心酔し、ロマン主義の影響を強く受けた。後には、シュレーゲルがシュライアマハーの住居にころがり込み、ふたりは同居するほどになった。これは、ベルリンのロマン主義運動の中核が作られたという文学的な事件であった。

『宗教論』と『独白』の出版

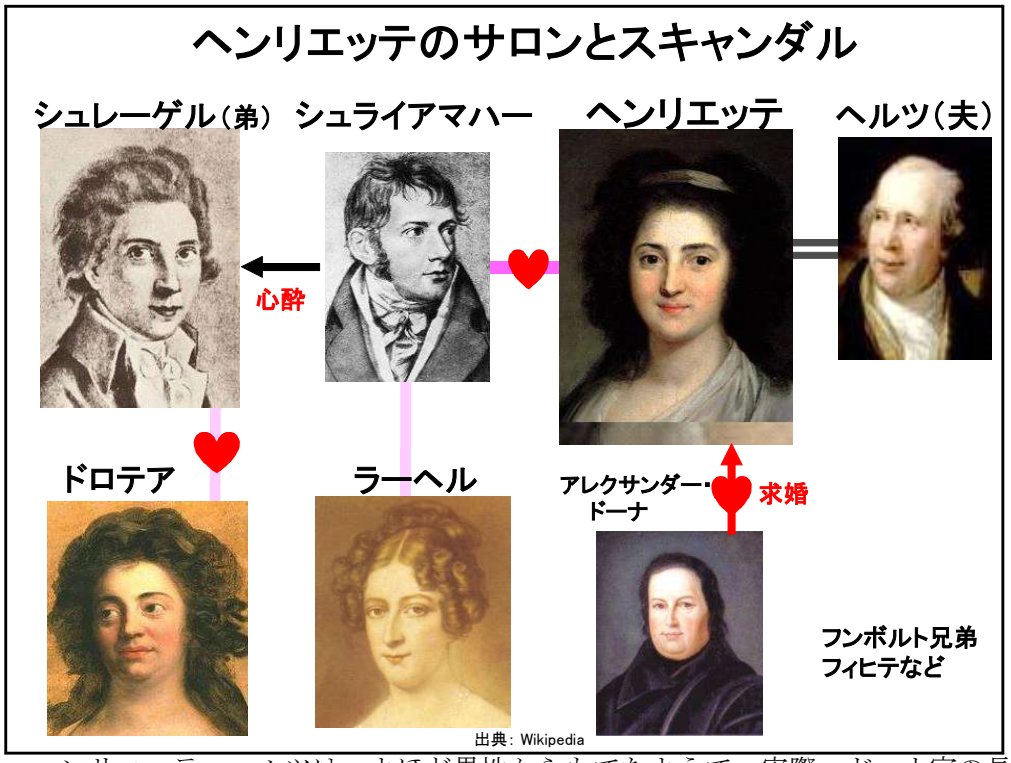
出典：岩波文庫

このシュレーゲルのすすめによって、シュライアマハーは、有名な『宗教論』（1799年）と『独白』（1800年）という本を匿名で出版した。ロマン主義の時代のシュライアマハーの代表作となった。

『宗教論』（佐野勝也・石井次郎訳、岩波文庫）は、「宗教を軽んずる教養人への講話」という副題がついている。当時、啓蒙思想によって「宗教」を軽蔑する知識人が多く、ヘンリエッテのサロンでもそんな雰囲気だった。そうした状況に対して、シュライアマハーは宗教独自の立場を明らかにした。しかし、この本を「感情宗教」であると批判したのがヘーゲルである（後述）。

『独白』（木場深定訳、岩波文庫）は、彼独自の哲学的世界観と人生観を語ったものである。1799年の暮から書き始められ、新ミレニアムの1800年に、「ひとつのお年玉」と書かれて出版された。

ヘンリエッテのサロンとスキャンダル



ヘンリエッテ・ヘルツは、よほど男性からもてたようで、実際、ドーナ家の長男アレクサンダーは、ヘンリエッテの夫が亡くなると、彼女にプロポーズをした。彼女は受け容れなかった。

また、シュライアマハーが左遷された1802年に、学生だったルートヴィヒ・ベルネがヘルツ家に泊まり客としてやってきて、22歳年上のヘンリエッテに夢中になり、自殺を企てた（未遂）というエピソードもある。

シュライアマハーは、ヘンリエッテ・ヘルツやラーヘル・ファルンハーゲンなど、多くの女性と交際したので、聖職者がサロンに出入りすることは不道徳とされた。また、女性たちがユダヤ人であったため、キリスト教聖職者がユダヤ教に近づくことも非難の対象になった。

シュレーゲルの不倫スキャンダルを擁護

さらに、シュレーゲルの不倫スキャンダルを擁護したことでも非難された。当時、シュレーゲル（弟）は、夫のあるドロテア・ファイトと不倫関係となった。彼女は、啓蒙思想の哲学者・モーゼス・メンデルスゾーンの娘で、若くしてユダヤ人と結婚していたが、ヘルツのサロンで文学に目覚めて作家となった。彼女は1799年に離婚して、シュレーゲルと再婚した。ユダヤ人の夫を捨て、プロテスタントとして結婚したため、周囲のユダヤ人社会から非難された。

のちに、シュレーゲルは、小説『ルツィンデ』（1799年）を書いて、２人の関係を描いた。この中で、シュレーゲルは、自由な恋愛ならば、結婚しているかいないかは問題ではないとした。愛のない結婚は神聖への冒涜であって、虚偽の結婚は容赦なく解消してよい。これこそが真の結婚であり、女性の解放なのだという。こうしたことを女性が言うのならわかるが、既婚女性とつきあっている男性が主張すれば、自分の不倫を正当化しているにすぎない。この小説により、シュレーゲル夫妻は社会から非難された。

ちなみに、シュレーゲル（兄）の妻カロリーネは、離婚して哲学者のシェリングと結婚した。彼の周りでは、このようなことは珍しいことではなかったのである。

そして、シュライアマハーは、シュレーゲルを弁護するために、『ルツィンデに関する覚え書き』という論文を発表した。これにより、聖職者であるシュライアマハーも社会から非難された。

シュライアマハーをめぐる女性たち

シュライアマハーは多くの女性に囲まれている。ここで参照したのは、『独白』（岩波文庫、1995年）のうしろについている訳者の木場深定による「友情・恋愛・結婚－シュライエルマッハーの場合」という付録である（木場､1995と略した）。

木場深定氏の付録にはぶっとんでしまった

『独白』（岩波文庫、1995年）のうしろには、訳者の木場深定による「友情・恋愛・結婚－シュライエルマッハーの場合」という文章が付録としてついている。この文章は、シュライアマハーの性的な生活を赤裸々に描いていて、実に面白く、驚くべきことばかりで、本論を書くに当たって大いに参考にした。人妻への横恋慕を繰り返し、「愛のない夫とは離婚すべきだ」と口説き、それを新しい男女関係の「倫理学」であると正当化したシュライアマハーは相当な男である。しかも彼は聖職者である。

もっと驚くのは、この木場氏の文章が、1943年という戦争中に発表されたということである。シュライアマハーの不倫哲学を堂々と紹介した文章が、軍の検閲に引っかからなかった。この文章を兵士が戦地で読んだら、国に残して来た妻たちが、牧師に寝取られているのではないかと不安になり、とても戦争どころではなくなるだろう。そんな状況のなかで、堂々とこういう文章を発表できる木場深定という人は、肝が据わっている。東北大学の西洋哲学史の教授をつとめた人である。

シュライアマハーが関係した女性は以下の通りである。

①フリーデリケ・ドーナ

フリーデリケ・ドーナ（1774～1801年）は、前述のように、家庭教師先ドーナ家の次女で、17歳であり、シュライアマハーは密かに思いを寄せた。彼女だけが未婚の女性であり、他はいずれも既婚の女性である。なお、調べてみると、フリーデリケ・ドーナ（1774～1801年）は、理由はわからないが、27歳でなくなっている。

②ヘンリエッタ・ヘルツ

ヘンリエッタ・ヘルツ（1764～1847年）は、たいへんな美貌で豊かな知的才能を持っていた。彼女の文学的サロンに出入りすることで、シュライアマハーはベルリンを代表する思想家と関係ができた。

③ラーヘル・ファルンハーゲン

ラーヘル・ファルンハーゲン（1771～1833年）は、シュライアマハーの女友達のひとりであった。文芸批評家カール・ファルンハーゲンの妻であり、のちの1820年代にベルリンに文学的サロンを開いて、ロマン主義の中心地となった。

④エレオノーレ・グルノウ

エレオノーレ・グルノウ（Eleonore Grunow; 1769または1770～1837年)は、シュライアマハーの同僚の牧師グルノウの妻であった。シュライアマハーは彼女と知り合った。12歳の時に15歳のグルノウと婚約させられ、不幸な結婚生活を送っていた。シュライアマハーはそれを聞いて同情し、それが恋愛に変わった。エレオノーレは、シュライアマハーがその生涯で最も愛情を注いだ女性であった。彼はエレオノーレと結婚したいと願い、夫との離婚を勧めたのである。愛のない結婚は神聖への冒涜であって、離婚こそ倫理的な義務であると。エレオノーレはかえって苦しい立場に追い込まれた。こうした関係は５年間も続き、２人は苦しんだが、ようやく1805年になって、シュライアマハーはエレオノーレを諦めた。

不倫の相手に離婚を勧めたことは、本人はロマン主義的な倫理学であるとしたが、エレオノーレの夫から

すれば、身勝手な我田引水にすぎない。シュライアマハーの言動は社会から非難を浴びた。

⑤妻ヘンリエッテ

ヘンリエッテ（1788～1840年）は、シュライアマハーの友人エーレンフリード・フォン・ヴィリッヒの妻であった。シュライアマハーとエーレンフリードは1801年に知り合っていたが、エーレンフリードは1804年にヘンリエッテと結婚し、２人の子どもをもうけた。しかし、２年後、1807年にエーレンフリードが病死し、ヘンリエッテは19歳で寡婦となった。シュライアマハーは、20歳年下の彼女に同情し、文通をした。そして、1809年にふたりは結婚した。夫婦の間には４人の子どもが生まれた（そのうち唯一の男子ナターナエルは９歳で早世した）。シュライアマハーは、ロマン主義に影響された青年期とは違って、成人期には過激さも身を潜めたようだ。

第３期「シュトルプでの孤独　プラトンの再興と新しい倫理学の批判的な準備」の時期

地方に左遷される

このように、シュライアマハーの派手な行動に対して批判が強くなった。周りの牧師からは、牧師の職を返上するように説得された。また、著作『宗教について』も汎神論的だと批判された。

このため、シュライアマハーは、ベルリンにいられなくなり、上司の牧師ザックの仲介で、1802年、34歳の時に、田舎町シュトルプの教会に転任させられた。これは実質的にベルリンからの左遷であった。彼自身は「荒野への追放」と呼んでいる。

ここでシュライアマハーの疾風怒濤の青年期は終わった。ここから彼は大人の学者・説教者の道を歩くことになる。

この田舎町に住んだ２年間は、彼の人生の中でも最も悩ましい時期であり、友から離れ、社交の機会に恵まれず、図書館もない環境で、じめじめした宿舎で健康を害したという。

後に妻となるヘンリエッテ・フォン・ヴィリッヒと出会ったのはこの時期である。実は、ここで６番目となる女性ルイーゼとも出会い、情熱的な文通をしている。実はまだ青年期は終わっていなかったのかもしれない。

シュライアマハーは、プラトンの翻訳に没頭し、また、カントやフィヒテの倫理学を批判した『従来の倫理学説批判綱要』を書くなど、思想的には充実した時期であった。ディルタイの伝記でも、この時期は、第３期「シュトルプでの孤独　プラトンの再興と新しい倫理学の批判的な準備」の時期として独立している。こうした著作が評価されて、ハレ大学に呼ばれることになる。

第４期「ハレー大学ー体系ーキリスト教との対決」の時期

ハレ大学の教授として呼ばれる

1804年、36歳のシュライアマハーは、ハレ大学に呼ばれた。ディルタイの伝記の第４期「ハレー大学ー体系ーキリスト教との対決」の時期が始まった。

当時、ヴュルツブルク大学神学部が新設され、シュライアマハーを教授として呼ぶ計画があった。ところが、それを知ったプロイセン国王のフリードリヒ・ヴィルヘルム３世が、シュライアマハーをヴュルツブルクに取られないように、ハレ大学に員外教授および大学教会牧師のポストを設け、彼を呼んだのである。その中心になったのは官僚のバイメであった。

なぜフリードリヒ・ヴィルヘルム３世がシュライアマハーを必要としたかというと、深井（2016）によると、フリードリヒ・ヴィルヘルム３世はもともと「改革派」の教会に属していたが、ルター派の王妃ルイーゼを迎えたからである。改革派とルター派の合同をはかるために、その両方と関係があったシュライアマハーを手元に置いておきたかったのである。

ハレ大学教授となったシュライアマハーは精力的に仕事をした。キリスト教についての多くの講義をおこない、『神学通論』という講義をはじめた。

しかし、ようやく仕事が軌道に乗り始めた1806年に、ナポレオンがハレを占領し、大学を封鎖したのである。ハレ大学の教授は教育を禁止された。

第５期「ベルリン　大学創設と教授として」の時期

ナポレオンの侵略で浪人に

そこで仕方なく、1807年、シュライアマハーはベルリンに移り、そこで浪人生活をした。ディルタイの人生では、第５期「ベルリン　大学創設と教授として」の時期に入る。

シュライアマハーは、愛国主義的な政治結社のために活動するため、1808年には、臨時政府のあったケーニヒスベルクに行った。そこで、首相シュタインやハルデンベルクといった改革派の政治家と仲良くなった。後にハルデンベルクによってフンボルトは長官に任命されるのであり、この人脈でシュライアマハーがフンボルトの助言者となったのかもしれない。

1808年には、ベルリンの三位一体教会の牧師に任命され、以後、ずっとそこでの牧師の仕事を続けた。牧師の仕事は、のちにベルリン大学教授となってもずっと続けられた。

1809年に、41歳でヴィリッヒと結婚した。彼女は知り合ったときは人妻で２人の子どもがいたが、1809年には未亡人となって結婚した。

ベルリン大学創設の実質的な指導者となる

前述のように、ベルリン大学創設までは、第１段階（ハレ大学ベルリン移転案）、第２段階（バイメ構想）、第３段階（フンボルト＝シュライアマハー構想）という３段階をへたが、シュライアマハーはいずれの段階にも深く関わっていた。

第１段階（ハレ大学ベルリン移転案）

1807年８月に、ハレ大学の教員が、国王に対して、大学のベルリン移転を求める請願書を出した。しかし、ハレ大学の教員にも意見の対立があり、シュライアマハーら進歩的な教授は、優秀な教授のみを選んで連れて行き、全く新しい構想で新大学をつくるべきだと考えていた。シュライアマハーは、当然自分は選ばれるだろうと想っていた。

第２段階（バイメ構想）

しかし、1807年に、バイメの招聘教授のリストにシュライアマハーは入っていなかった。同じ進歩派のヴォルフは招聘されたのに、シュライアマハーは選からもれた。招かれなかった恨みもあり、シュライアマハーは、1808年に「ドイツ的意味での大学についての随想」という本を出版し、バイメの高等教育機関構想を徹底的に論破した。バイメが依頼した10名の大学構想は、バイメへの意見書として書かれたので、フィヒテのものを除いて公開されなかったのに対して、シュライアマハーの大学論は早く出版されたので、多くの人に読まれた。この本は「大学論として古今を通じて最大の傑作」と評価されている（梅根, 1961）。

シュライアマハーにとって幸運なことに、1808年6月に、バイメは失脚したため、バイメ構想は頓挫した。

第３段階（フンボルト＝シュライアマハー構想）

1809年２月、文化教育局の長官フンボルトが大学創設を引きついだが、教育のシロウトだったフンボルトに助言したのがシュライアマハーであった。フンボルトはシュライアマハーの書いた「ドイツ的意味での大学についての随想」を読んで共鳴したようだ。

シュライアマハーはバイメと仲が悪かったので、バイメ構想においては無視されていたが、しかし、バイメが失脚したため、大学設立におけるシュライアマハーの位置が急浮上した。前述のようなシュタインやハルデンベルクとの政治的な近さもあったのかもしれないし、また、ドーナ伯爵のコネも大きい。つまり、シュライアマハーは昔ドーナ伯爵の子息の家庭教師をしたが、そのドーナ伯爵が今や内務省主幹となっていたため、彼をフンボルトに推薦したのである。

シュライアマハーは、ベルリン学術局の責任者となり、ベルリン大学設置委員会の委員となった。ベルリン大学の創設理念とされたフンボルトの「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」という文書は、とくに前半部分はシュライアマハーとの共同作業だという（深井、2016）。1810年２月には、学術委員会の委員長として大学の人事権を握った。つまり「フンボルト＝シュライアマハー構想」と呼ぶのがふさわしい。ベルリン大学の構想は後に「フンボルト理念」として神話化されたが（前述）、フンボルトという名前は、創設チームの「かんむり」にすぎず、実質的な指導者はシュライアマハーであった。よって「フンボルト理念」は「フンボルト＝シュライアマハー理念」と呼ぶべきであろう。

シュライアマハーがフンボルトへの助言者としてベルリン大学創設の実質的な指導者となった（深井, 2016）ことは、少し前のベルリン大学論（梅根, 1961;1973）や、フンボルトの伝記（亀山, 1978；西村, 2015）などには触れられていない。ディルタイは、『ドイツ総合伝記辞典』に以下のように書いている（増渕、2000）。

シュライアマハーは、フンボルトのもと、教育局において、ペスタロッチの方法にもとづいた初等学校の改革、近代的ジムナジウムの構想、ベルリン大学創設の準備作業など、教育問題のあらゆる場面に携わった。1809年にフンボルトが教育大臣を引き受けてから、シュライアマハーはベルリン学術局の責任者として寄与した。またベルリン大学設立委員会の委員として、教授人選におけるフンボルトの個人的助言者として寄与した。

出典：増渕幸男『シュライアーマッハーの思想と生涯』玉川大学出版部、2000.

ベルリン大学の開学

1810年10月にベルリン大学は開学した。43歳のシュライアマハーはベルリン大学教授となった。その初代神学部長に就任し、大学の運営に携わることになった。
実は、開学のずっと前の1808年から、ベルリンで大学設置の準備講義として、公開講義をおこなっていた。フィヒテやシュマルツなどもおこなっていた。

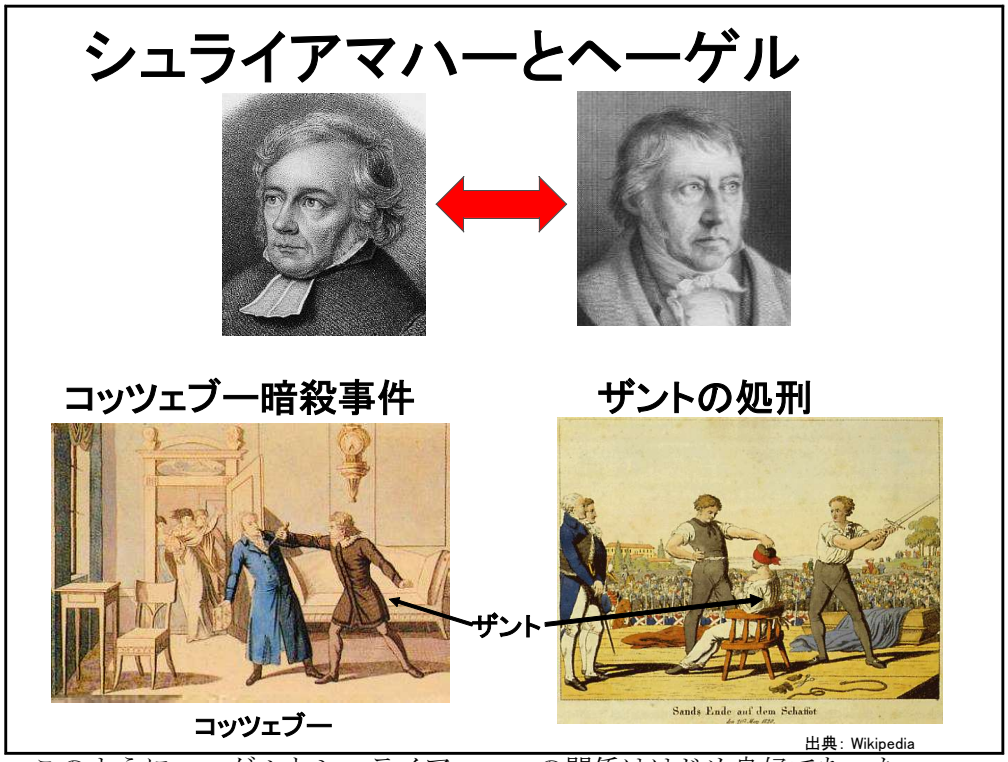
学長フィヒテとの対立

1811年に、選挙によりフィヒテがベルリン大学の学長に選ばれたが、そののちフィヒテとシュライアマハーの対立が深まった。フィヒテは、学長就任演説において、学生たちの決闘や乱暴行為（下級生いじめのペンナリズム）や、独善的な学生組合について、「大学の自由」を妨げるものとして否定した（後述）。これに対し、神学部長シュライアマハーは学生組合に対しては妥協的な態度をとっていたので、フィヒテと対立することになった。案の定、学生たちはケンカをして、大学当局から処罰を受けた。これに対して学生組合はフィヒテを恨み、これに教員集団も巻き込まれ、フィヒテ派とシュライアマハー派に二分された。1812年、業を煮やしたフィヒテは、ついに学長を辞任した。シュライアマハーは、フィヒテの講義と同じ時間帯に自分の講義時間をぶつけたという。
シュライアマハーは、何回か神学部長をつとめ、1815～16年にはベルリン大学の第６代学長に選ばれた。

ヘーゲルをベルリン大学に呼ぶ

1818年には、ヘーゲルがベルリン大学の哲学部教授として呼ばれた。ヘーゲル（1770～1831年）はシュライアマハーの２歳下であり、ほぼ同年齢である。増渕（2000）の本は、シュライアマハーとヘーゲルの人生を交互に書いた異色の伝記であり、２人がいかに同じような経歴（神学校→家庭教師→ギムナジウム教師→地方大学教授→ベルリン大学教授）を辿ったかがわかって興味深い。
ヘーゲルがベルリン大学に呼ばれた経緯も面白い。1814年に哲学部の教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のままだった。1816年に後任として、ヘーゲル、シェリング、フリースが候補となり投票の結果ヘーゲルが決まった。シュライアマハーもヘーゲルを推した。ヘーゲルはシュライアマハーの『宗教論』を批判していたが、シュライアマハーはそれほど気にしなかった。しかし、大臣のシュックマンが反対したため、ヘーゲルはすでに決まっていたハイデルベルク大学に行ってしまった。その後、1817年にシュックマンの後任として文部大臣となったアルテンシュタインが、ヘーゲルをベルリン大学に呼ぶことを許可し、1818年に赴任した。

シュライアマハーとヘーゲルの対立へ



このようにヘーゲルとシュライアマハーの関係ははじめ良好であった。
しかし、1819年におこったコッツェブー殺人事件をめぐって、２人は対立するようになった。この殺人事件は、学生運動でおこった内ゲバ事件である。イェナ大学のブルセンシャフト（学生組合）のメンバーであったコッツェブーが、ギーセン大学のザントによって暗殺された。ザントは死刑となった。この事件を反体制運動として弾圧したのが、オーストリアの宰相メッテルニヒであり、1819年のカールスバードの決議によって、ブルセンシャフトは禁止された。また、言論は統制され、ブルセンシャフトのリーダーを「デマゴーグ」と呼んで、デマゴーグ狩りがおこなわれた。この中で、ベルリン大学教授だったデ・ヴェッテが、コッツェブー殺人者ザントの母親に慰めの手紙を出したことで逮捕されてしまう。このデ・ヴェッテを弁護した

のがシュライアマハーである。彼は政府の動きに対抗したので、さまざまな圧力が加えられた。フィヒテの時代からシュライアマハーは学生組合には妥協的であった。
　一方、ヘーゲルは、デ・ヴェッテの免職を受けいれようとした。これよってシュライアマハーと対立するようになった。ヘーゲルは、フィヒテと同じく、学生組合を禁止する大学側に立った。
　さらに、シュライアマハーがベルリン科学アカデミーの改革をおこなうようになると、アカデミーに入れなかったヘーゲルはシュライアマハーと対立するようになる。そもそも２人は哲学のスタイルも違う。ヘーゲルは体系的な思考こそが哲学としたのに対して、シュライアマハーは生き生きと哲学することこそが大切だとした。
　ヘーゲルは1829年にベルリン大学の学長に選ばれた。ふたりの対立は1831年のヘーゲルの病死まで続いた。

学者としての活躍

　1834年2月12日、シュライアマハーは肺炎によりベルリンにて亡くなった。享年66。
　1810年に教授となってから死にいたる24年間、彼はベルリン大学の育成に尽くした。ベルリン大学で彼が講義した領域は、神学、哲学、倫理学、政治学、教育学、心理学、美学、などきわめて多方面にわたっている。
　以下、神学、哲学、教育学の３つをみていこう。

①神学「近代神学の父」

　シュライアマハーは、近代神学の父（平凡社哲学事典）と称される。シュライアマハーの神学は、①哲学的、②歴史的、③実践的の３つに分けられる。彼は大学教授という教育者であるばかりでなく、教会の説教者として一生涯説教を続けた宗教家・実践家でもあった。
　シュライアマハーの『宗教論』（1799年）は、前述のように、啓蒙思想によって「宗教」を軽蔑する教養人が多くなっており、そうした状況を攻撃して、それに対してシュライアマハーは宗教独自の立場を明らかにした。当時は、一般に、聖書は「道徳」を導くものだと考えられていたが、シュライアマハーは宗教は道徳ではないとする。カントも宗教は道徳に従属するとしたが、シュライアマハーによると、逆であり、宗教に従属するものが道徳や哲学（形而上学）であるとする。宗教の本質は、宇宙（すなわち神）の神秘的一体化の聖なる瞬間である。つまり、宗教は、思考や理性にあるのではなく、直感と感情のうちにある。「感情」すなわち宗教的感情というものを重視する。シュライアマハーの宗教論は、合理主義的神学ではなく、反合理主義的な神学である。ここにはスピノザの汎神論の影響があると言われる。
　ヘーゲルは、こうしたシュライアマハーの主観主義を批判した。ヘーゲルはシュライアマハーの宗教を「感情宗教」だと揶揄する。神については「動物的無知」である。シュライアマハーによると、宗教は主観的なものなので、「神学」は成り立たないし、宗教教育も不可能だということになる。と罵倒する。ヘーゲルによると、宗教を反省的にみる神学は成り立つし、宗教教育も可能である。

②哲学「解釈学の父」

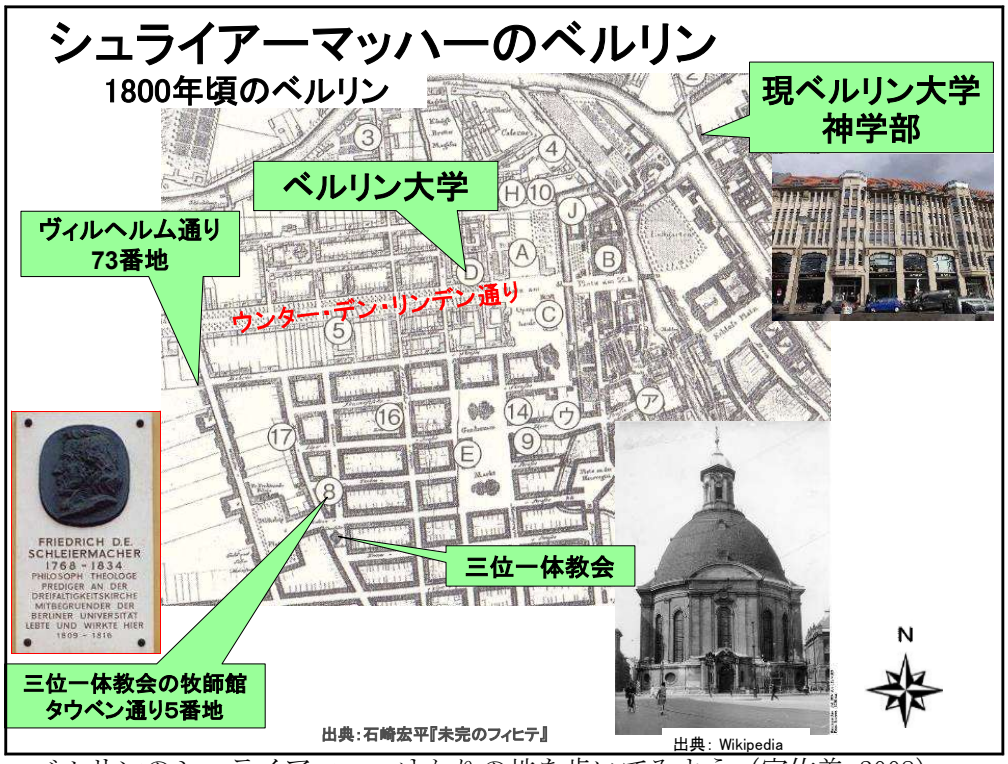
　シュライアマハーは「解釈学の父」とも呼ばれる。聖書解釈学から始まり、それぞれの領域の個別解釈学を超えて、一般解釈学を発展させた。その後、ベルリン大学の哲学者ディルタイ（1833年～1911年）は、シュライアマハーの解釈学を継いだ。ディルタイは自然科学に対する精神科学の方法論を打ち立てようとして、自然科学では説明するerklären、精神科学では了解するverstehenとした。この精神科学の了解方法の中心に解釈学を置いた。そこから、ハイデガーの『存在と時間』へとつながり、またハイデルベルク大学のガダマーの哲学的解釈学へとつながる。ガダマーは、シュライアマハーとディルタイの解釈学を「ロマン主義的解釈学」と呼んだ。
　なお、ディルタイは、シュライアマハーの詳細な伝記に取り組み、『シュライアマハーの生涯』（上下）を発表した。法政大学出版局から出ている「ディルタイ全集」の第９巻と10巻を占める大著である。
全集第９巻の上巻は、シュライアマハーの青年期からハレ大学時代までの伝記となっている。私が知りたかったベルリン大学創設期以降については、第10巻の下巻で扱っているのかと思ったら、そうではなく、下巻はシュライアマハーの各学問領域別の構成であった。ベルリン以降について扱っていないのにはがっかりした。ちなみに、ディルタイは、前述のように、シュプランガーの師である。

③教育学「精神科学的教育学の祖」

　シュライアマハーは、家庭教師やギムナジウム教師の体験から、子どもを教えることを本職としたいと思った。しかし、生活上の必要のために放棄し、牧師の職についた。牧師の職よりも、教師の職のほうが、はるかに立派で自分の性に合っていると思っていた。姉への手紙に以下のように聞いている。「教育というものはひとつの専門職です。私は教育について相当な経験を持っておりますし、これからも毎日それをやりたいし、そして教育に興味を持っております。現に最近教え子を持たないことを私はしばしば寂しく感じております。私には大人でも子どもでもいい、自分の子でも他人の子でもいい、とにかく他人を教育するということは、すべての人間のおろそかにしてはならない義務のように思われるのです。それを果たせる何かの機会でも見のがさず捉えることができたらたいへん仕合わせだと思っております。」（梅根1975）。青少年を教えることはシュライアマハーにとって喜びであった。このような教育好きと教育的才能の自信が彼の教育論を貫いて流れている。

シュライアマハーはベルリン大学で、1813年、1820年、1826年の３つの学期に教育学の講義をおこなっている。シュライアマハーの教育論は、宗教論と同じく、思考や理性面の教育よりも、感情面の教育を大切にする（金子, 1974）。前述のように、彼はベルリン学術局の責任者となり、1810年からは学術委員会の委員長として、国の教育行政に深くかかわり、ベルリン大学創設の中心でもあった。彼の教育思想は教育行政に反映され、また行政経験が教育思想を形作ることになった。

シュライアマハーのベルリン



ベルリンのシュライアマハーゆかりの地を歩いてみよう（宇佐美, 2008）。

1796年にシャリテ（慈善病院）の牧師としてやってきたベルリンと、ヘンリエッテ・ヘルツのサロンについては前述のとおりである。左遷させられた後、ハレ大学封鎖のために、1807年に再びベルリンにやってきた。

①三位一体教会の牧師

1809年には、ベルリンの三位一体教会（写真右下）の牧師となった。この教会は消失して、今はない。

②三位一体教会の牧師館

1809年から1816年には、三位一体教会の牧師館に住んだ。1810年からはベルリン大学教授となったが、牧師も兼ねていたので、牧師館に住んだ。

現在、グリンカ通りのタウベン通りとの角に、シュライアマハーの記念板が貼ってある（写真左）。そこには以下のように書いてある。

Friedrich D. E.
Schleiermacher
1768 - 1834
Philosoph Theologe
Prediger an der
Dreifaltigkeitskirche
Mitbegruender der
Berliner Universität
lebte und wirkte hier
1809 - 1816

③晩年の家

1830年頃にはヴィルヘルム通り73番地に住んだ。ここで1834年に肺炎で亡くなった。

④現ベルリン大学神学部

現在、ベルリン大学神学部は、博物館島の東側にある。Ｓバーンのハッケシャー・マルクト駅の南側である（後述）。建物の１階ロビーには、シュライアマハーの胸像が飾ってある。

ベルリン大学神学部のシュライアマハー像

ベルリン大学神学部の
シュライアマハー像

シュライアマハーの言葉と像

ベルリン大学神学部の建物の１階ロビーに入ってみると、シュライアマハーの胸像が飾ってある。
その後ろの壁には、シュライアマハーの言葉が書かれている。
„Soll der Knoten der Geschichte so auseinander gehen, das Christentum
mit der Barbarei und die Wissenschaft mit dem Unglauben?“
歴史の結び目はそれほど離れ離れに進むべきだろうか、キリスト教は異教と、学問は不信仰と？
『リッュケへの第２書簡』

＜第５章の参考文献＞

丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ:精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
増渕幸男『シュライアーマッハーの思想と生涯：遠くて近いヘーゲルとの関係』玉川大学出版部、2000.
ディルタイ（森田孝・麻生建・薗田坦・竹田純郎・齋藤智志 編集校閲）『シュライアーマッハーの生涯　ディルタイ全集第９巻』法政大学出版局、2014.　（原書1870年）
ディルタイ（森田孝・麻生建・薗田坦・竹田純郎・三浦國泰 編集校閲）『シュライアーマッハーの生涯　ディルタイ全集第10巻』法政大学出版局、2016.　（原書1870年）
プレーガー（増渕幸男監訳）『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部、1998.
山脇直司「シュライエルマッハーの哲学思想と学問体系」廣松渉・坂部恵・加藤尚武（編）『講座ドイツ観念論４自然と自由の深淵』弘文堂、1990.
篠原助市『シュライエルマッヘル』(大教育家文庫18)、岩波書店、1939.
木場深定「友情・恋愛・結婚－シュライエルマッハーの場合」　シュライエルマッヘル『独白』（岩波文庫、1995年）に収録.
シュライエルマッヘル（佐野勝也・石井次郎訳）『宗教論』岩波文庫、1949.
シュライエルマッヘル（木場深定訳）『独白』岩波文庫、1995年.
シュライアマハー（深井智朗訳）『ドイツ的大学論』未来社、2016.
深井智朗『訳者解題　ベルリン大学創設とシュライアマハーの「大学論」（1808）』　『ドイツ的大学論』未来社、2016に収録.
シェライエルマッヘル（梅根悟・梅根栄一訳）「ドイツ的意味での大学についての随想」　『世界教育学選集17　国家権力と教育：大学論・教育学講義序説』明治図書、1961.
梅根悟「シュライエルマッヘルとその「大学論」、及び「教育学講義序説」について」『世界教育学選集17　国家権力と教育：大学論・教育学講義序説』明治図書、1961に収録.
宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008
潮木守一『ドイツの大学　文化史的考察』講談社学術文庫、1992.
金子茂「シュライエルマッヘル」　梅根悟・長尾十三二（編）『教育学の名著12選』（学陽書房、1974）に収録.

●元のページに戻る

http://tannoy.sakura.ne.jp/